YNAC通信

2005.2.1.　NO.20

地域の伝統文化

松本　毅

昨年は、戦争・台風・地震・津波と悲しい出来事が次々と起こり、年末は暗い話題ばかりだった。しかし、時は確実に巡り、今年も無事明けていった。いつものように益救神太鼓の奉納を終え、初詣で賑わう益救神社で、「今年こそは明るい、希望に満ち溢れた年になるように」と心より祈った。

さて、昨年の暮れに屋久島ガイド連絡協議会の忘年会が開かれた。場が盛り上がってきた頃、来賓でお越しいただいた屋久島観光協会会長の柴鐵生さんが永田集落で歌われる歌を何曲も披露して下さった。それは二次会までもつれ込み、他のガイドの踊りも加わり、やんややんやの喝采となった。そして、年が明け、屋久島地区エコツーリズム推進協議会作業部会の新年会では、事務局である上屋久町役場の日高美智男さんが、永田集落に伝わる「トビウオ招き」を披露して下さった。「私はこの歌を母親のおなかにいるときから聞いて育ちました」とのこと。お二人に共通していたのは、誰が引っ張り出したわけではなく、自ら歌いたくてしょうがない、こんな楽しい席で歌わずにはいられない、という風で実に楽しそうに歌われたことである。こんな郷土の歌を持っておられることがうらやましく思われた。

私の住む小瀬田集落には、伝統芸能として「四つ竹・棒踊り」というものがある。竹を小さく割った鳴り子を打ち鳴らして踊る四つ竹踊りと男女が対になって棒を打ち合いながら踊る棒踊りが組み合わされ、お盆に初盆を迎えるお宅と墓地で踊り、遺族を励ました。明治の終わりごろ、芸能の乏しい小瀬田に、寺田三四郎という方が、九州のあちこちを回り覚えてきた芸能を、小瀬田で十二歳（コニセ）から二十歳（ニセ）の男子青年に伝え、定着したといわれている。その後、青年団が引き継いだが過疎のため人数がそろわず、子供会・子供会育成会が引き継ぐことになった。私の子供たちも小学校・中学校で運動会の演目として習い、披露した。しかし、子供たちにとってそれは運動会の組み体操と同じ認識しか持ちえていないような気がした。子供の練習を見に行った私に年配の方々が昔の「四つ竹・棒踊り」のことを熱く語ってくれたのだが、そのような当時の人々の思いがまったく抜け落ちてしまっていたように思えた。ただ運動会で子供たちを踊らせれば伝承されていくものではなく、意味を語って聞かせ、ニセ達が意気揚々と踊って見せてこそ子供たちに憧れが生まれ、伝統芸能として伝承されていくのではないだろうか。そこで、私は区の役員の方に「是非『四つ竹・棒踊り』保存会を作り、青年団で人数がそろわないのであれば、集落の大人達が皆で踊って見せてください。そして、盆踊りには是非子供たちに大人達が楽しく、かっこ良く踊って見せてあげてください。」と提案をした。その後、保存会が結成され、子供会育成会に任せていた運営も保存会が行うことになった。保存会では、昔はああだった、こうだったと話が出され、集落の伝統芸能として保存をしていく機運が盛り上がってきた。そんな大人たちの姿を見て、「四つ竹・棒踊り」は子供たちに伝承されていくだろう。

今、屋久島ではエコツーリズムの議論がされる様になってきた。その中に、「地域の伝統文化に学ぶ」ということがいわれる。しかし、地域の人々が自分たちの伝統・文化をしっかり見つめなおさなければ、観光客に提示することは出来ない。このエコツーリズムの盛り上がりを機に、屋久島の人々が今一度、地域の中に埋もれてしまった伝統文化を見直してみてはいかがだろうか。

YNAC通信 20号 特別企画

YNAC's Best Selection

Best Season Best Spot in Yakushima

松本　毅　　小原　比呂志
藤村　早苗　　岡田　愛
高橋　宏美　　鷲尾　紀子
樫村　精一　　市川　聡（座長）

【感動の瞬間】

市川：YNAC 通信の記念すべき 20 号ということで今回は「YNAC ベストセレクション」というテーマで座談会を開催します。YNAC 通信を 20 号積み重ねる歴史の中で皆それぞれいろんな経験をしてきたと思います。ということで、屋久島で見て感じたベストと思うところをそれぞれに語っていただこうと思います。まず始めに鷲尾さんあたりに、屋久島にきて一番感動した瞬間、「この時が！」という辺りを語っていただきましょうか。

鷲尾：私が今でもはっきり覚えているのは、屋久島にきた時の白谷の夜です。白谷山荘で2泊過ごしたんですけど、1泊目は雨でした。ところが次の夜、さぁ寝る前にトイレでも行こうとテントの外に出た時、星が見えないくらいすごく明るい月夜だったんです。ちょっと明るいブルーの空で、月明かりに照葉樹の葉が光るんです。昼間の葉が金色にキラキラ光るのは見慣れていたんですけど、月明かりの照葉樹は銀色だったんです。それが風に音なくゆれている様子が一番最初に、そして強く残っていますね。

松本：私の感動した一瞬…、沢山あるけれど、いつまでも印象に残っているのはやっぱり初めて屋久島にきたときの印象だね。口永良部にダイビングに行って、帰る時の船からの屋久島の景色。2 月っていうのは普通北西の風が吹いて大しけになるのに、その時は鏡のようなベタ凪で、水中カメラのフィルムが2枚残ってた。その2枚で屋久島の写真を撮ろうと思ったとき、パッと鏡のような海にポンと屋久島があって、その山頂部には雪が積もってて…。あれを見た時、「ああ、ここだ。」と思った。あの瞬間は今でも忘れられない。

市川：どうですか、小原さん。やっぱり初めてきたとき…？

小原：初めての時は雨の中、一人でね、股擦れはひどいは、靴擦れはひどいはで、燦々たる4日間で、印象は強かったけど感動の屋久島ではなかったな（笑）。…やっぱり沢だね。記録の無いところで、「わぁ、こんなところがあったんだ！」というのが二回ほどあったな。一回目は安房川本流だね。大きな谷で結局三回かかって全貌を明らかにしたんだが、最後の時はいい天気で「こんなところを俺が初めて来ているよ。」と思いながら、巨大な花崗岩の壁に囲まれたプールを一人で泳いでいった、あの時の感じは忘れられないね。

市川：一人で行ったの？

小原：そう、一人で。それからもう一つは淀川で、チャンスがあったので登った。そうするとあの通り、なんとも形容しようのない美しい沢で、世の中にこういう沢があるのかと思いながら登ったね。

松本：その 2 本は後に僕らも行ってるでしょう。

小原：あの時の感動が君たちを導いたんだよ（笑）。

樫村：この間、（淀川の下流で）酸性雨調査で水を採りに行った、あのときに見たコケの景色は今までで一番きれいな景色でした。（あまりにきれいで）入っちゃいけないのかと思いました。

藤村：そこへ宏美ちゃん（高橋）を始めて連れて行った時、「サナさん、ここに名前を付けてもいいですか？『コケコケワールド！！』」って（笑）。

市川：宏美はそのときから変わってないなあ（笑）。

小原：でも、確かに「コケコケワールド」っていう以外にとりあえず表現がないんだよな。

市川：次に、サナさん（藤村）は？

藤村：そうですね。一番に目に浮かんでくる景色っていうのは、最初に黒味に登った景色ですよね。

松本：俺が（ツアーで）連れて行った！

藤村：ええ、松本さんと…（笑）。これは絶対に自分の中では外せないですよね。1998年の10月に来たんですが、それまで自転車に乗って森の中を走ったりすることはあったんだけれども、遠足以来山登りなんてしたことがない。行けるのかなぁ…なんて思いながら森の中を抜けて、だんだん上がっていくと木々が低くなり、森林限界を超えて山頂に立った瞬間、パァッと海が見えて凄くきれいにトカラ列島も見えたんです。風も無くって青空がきれいで…。あの黒味の岩の上に立った映像っていうのは、私はまだ新鮮に、昨日のように覚えていますね。

岡田：素敵な想い出だね。

藤村：感動した瞬間…結局それが、私の運命を変えてしまった（笑）。

市川：さて、序章はこれくらいにしておいて…。

【YNAC ベストセレクション】

市川：皆、屋久島でいろいろ感動していると思うのですが、今日は YNAC ベストセレクションということで、この時期ここへ行ったら凄いという辺りを是非語り合いたいと思っています。どうですか、そういうところ小原さんが強そうだと思うんですが。

小原：うーん、俺は結構マニアックなんだよ、皆知らないと思うけど。

市川：すべての顧客が認めるマニアックだと思うんだけれど（笑）。

小原：シブイところで言うとやはり、「屋久島海洋生物研究会」時代の栗生・塚崎調査っていうのが…。

松本：一年間やったもんね。

小原：うん。一年中見ているともの凄く変化するんだよね。海藻担当だったけど、塚崎は「カマゼのハナ」といって岩場にポットホールが一杯ある。そこへ 4 月頃に入ってみると、それぞれの穴で生えている海藻が違うんだ。屋久島は南方系だから緑藻という緑のやつと、紅藻という赤いやつがたくさんあって、それがなんというか…「宝石箱」なんだな。

松本：「宝石箱」っていうタイドプールを作ったもんね。

小原：そう、命名をした。一つの中にワッとあるんだね。4 月の屋久島の潮間帯のきらびやかなこの感じは、ちょっと他にないんじゃないかっていう気がするね。屋久島は南北の狭間みたいなところなんだが、あるところを見ると何とも言われぬ美しい海藻の群落ができるという、（塚崎というのは）本当に珍しいところなんだよ。それに気がついて「いいなぁ…」と感じたな。

【コケコケワールド】

鷲尾：私は去年辺りから季節が変わる前に大気が動くんだなと感じるようになってきました。大気が動くとそれに森がちょっとずつ反応していく。人の営みも含めて、四季が移っていくというのを感じるのが今はとっても楽しいんです。その中でもやっぱり春の西部が好きですね。日に日に色が移り変わっていくのも凄く美しいし、こんなに緑色ってあった

【西部の新緑】

んだ！っていう緑が出るあの照葉樹の新緑が…。

小原：4 月始めか。

鷲尾：3 月の中旬から 4 月上旬。また、出かける日によってもぜんぜん色が変わっていくじゃないですか。春の森を見ると「山が笑う」って言葉が、よくできている言葉だなって。風に揺れる照葉樹の春が好きです。

小原：「森が動き出した」っていうことがあったよね。ムズムズっという、「あ、動き出した！」っていう。春の雨の後の一日、二日くらいのさ。

鷲尾：ああいうのを見ているとドキドキしますよね。

市川：5 月は…？

岡田：私は海が動くのは 5 月だと思います。冷えていた水がどんどん緩んできて、5 月くらいになると泳ぐのもなんとか楽しめるようになってきて…、魚も動きが活発になる季節なんです。一斉にいろんな種類の魚が恋の季節を迎えて。しかも、夜が明けるとき、一日のうちで朝が一番感動的！ 夜明けの海と、中に入ると魚もちゃんと目覚めるんだということに気付くんです。

小原：5 月…屋久島の花といえばツツジ、シャクナゲでしょう。7 種類あるツツジが順番に咲くわけだけれども、5 月中旬に山を歩けば、だいたいどこかで全部咲いているわけなんだよ。

鷲尾：来年はシャクナゲが楽しみですね。

市川：（俺が）初めてきた年はめちゃめちゃきれいだった。それこそ一番感動した瞬間かも知れない。投石平でガスがさーっと流れていった瞬間に岩やビャクシンの間を埋めるように一面シャクナゲが現れたときには、「これが極楽浄土のイメージなんだな」と思ったよ。極楽浄土の絵を書いた人はきっとこういうことを見た人なんだなって。

松本：そういえば、その年はよく「極楽浄土」って言っていた（笑）。

小原：あの年、志戸子の沖のサンゴ礁に初めて砂川さん（屋久島在住のフィールドガイド）に連れて行ってもらって…。

市川：それも凄く感動した！ タマガリの…。

岡田：「タマガリ」？

小原：タマガリ…たまがった…驚いた（の意）。

市川：志戸子砕石の下で潜った時、浅いリーフに顔をつけた瞬間、目の前をブダイやら何やら魚の群れが右へ左へがダダダダーッと…あれは驚いたね（笑）。みんな種類が違っていて、初めてだから名前なんか一つも知らないんだけど、カラフルな奴らが一杯いて、本当にタマガッタ。

小原：あの感じはやっぱり屋久島なんだよね。奄美大島でもあんなの見ないもんな。

松本：その感動を（市川が）海中公園センターの機関紙に投稿したんだよ。今でも屋久島の海の話はあの文章が元になっている。

市川：それが今、栗生の海中公園につながっているんだよね。

藤村：次の 6 月はなんと言っても梅雨ですね。私は梅雨の晴れ間の青空が好きです。

松本：ああ、それあるね。中休みというか。

藤村：紫に近い青空が見える瞬間っていうのは島の人の特権ですね。

市川：梅雨の晴れ間の青空を見るならば、どこがいい？

藤村：梅雨の青空で一番印象に残っているのは…事務所のとなりの空き地（笑）。あそこで見上げた青空が凄いきれいだった。

鷲尾：身近な生活の中でそういう瞬間があるっていうのが贅沢だよね。

岡田：当たり前にあるっていうのがね。

市川：どうですか？宏美さん。だんだん夏に近づいてきたじゃないか。

鷲尾：宏美のシーズン！（笑）

小原：高気圧ガール！（笑）

高橋：（ダイビングの）ベストシーズンは…初夏から秋かな。気温もぐんぐん上がってきて、いろんな生き物がいちゃいちゃしだして…。

市川：ナマコ、ヒトデの放精…（笑）。それは、いつ？

高橋：丁度、初夏ですね。7 月の大潮のとき。陸上みたいにこの季節に必ずこういうことが起こると予測できないんです。でも、初夏に生まれたのが秋になると私達の眼に見えるサイズになって、ブダイの赤ちゃん達が群れを成して泳いでいく姿を見ていると「あぁ、初夏に生まれた（子供達）なのね。」って…、嬉しくなる！

松本：ショカ、ショカ（笑）。夏は海のベストシーズンっていうのは確かにそうなんだけど、俺の好きなのは 10 月かな。夏の華やかなシーズンからちょっと秋のかげりが見え始めて、水温もヒヤッとする瞬間。賑やかさは続くんだけど、季節の移り変わりと同じように時間の移り変わり、色合いがふっと変わる瞬間。賑やかなんだけど確実に冬に向かっていく、というの見えるのが 10 月から 11 月。

鷲尾：私も秋の空気が入りこんだ朝とか、ウワーッて感じる。

岡田：その季節のベストポイントはどこですか？

松本：今年サンゴ調査で行った口永良部（島）。口永良部は海としては凄い。

市川：屋久島の海のベストシーズン・ベストポイントは？

松本：スキューバだけではなく小原さんも言っていたけれども、春の大潮。昼間（潮が）一番引く季節。この季節のタイドプールはダイナミックだよ。

小原：ハマデバイ、だよね。

松本：浜へ出る、あのタイミングは本当によくしたものだよね。春の大潮の時、磯っていうのは海藻も多いし、それを食べるウミウシだとかいろいろ来るし、本当に劇的だね。産卵シーンも見られるし…。

小原：ところが屋久島の海藻って、毒物が多いんだよ。シワヤハズとか、ソゾとか。でもミルは（他の地では）大和朝廷への貢物だったんだぜ。

松本：11 月までいったね。

小原：10・11 月といったら陸上がベストシーズンだよ。

岡田：11 月はやっぱり動物じゃないですか？

鷲尾：ああ、恋の季節を迎えた…ヒキガエルは 11 月かな？10 月は…鳥です、鳥！サシバとヒヨドリが集団で渡ってくるのを見ると、冬が来る！（って感じる）。

小原：それをハヤブサが追いかけて来るんだよな。

市川：あれを見るのは湯泊温泉がいいよ。この秋久しぶりに入っていたら頭の上に鷹柱が立って、次々とサシバが集まってきて…。

小原：でも、やっぱり 10 月 11 月は山だよ！ 屋久島の山のベストシーズンは夏じゃない、春と秋とか一番からっと気持ちのいいシーズンで、やはり 4・5 月と 10・11 月に尽きるね。

松本：それは海も同じような雰囲気だね。

市川：例えば、春と秋があるとして 4・5 月はここが良くって、10・11 月はこっちが良いっていうのはないの？

小原：春は自然を見るのに良い季節なんだ。そして 10・11 月は自分自身に良い季節なんだよ。基本的に登山というのは自分との対話なんだ。だから普通、登山のためのベストシーズンは、屋久島なら快適な 10・11 月。知的好奇心に満ちた登山者が感じるフラストレーションというのは見ている自然がよくわからないということが多いんだけど、自然をしっかり見ようというときには春がいいんだな。

市川：なぜ、春？

小原：新緑、開花、色々動きがあって、それが美しい。実りは秋に来るんだけれども。自然の中にいる自分というのを楽しむには秋がいいんだが、自然そのものを見るのは春。

松本：春は海岸だよね。海岸ってパッと冬から季節が動く。例えば産卵行動が始まるっていうのに感動するのは、春から初夏にかけて。でも、秋は海の水温が下がって身がきゅっと引き締まるようなこともある。春に開花したものが実を結ぶとか、春に生まれたものが大人になっていくという、冬を越し

【太忠岳から雲海を見下ろす】

て次のものへと受け継いでいく、ウワーッとなったもの（芽吹いた物）が収束していく、それが秋。それは海でも山でも同じ。そういう意味で 10・11 月というのは収束の時期かなって思う。

藤村：冬の安房川ってきれいですよね。水の透明度も違うし。川が賑やかなのは…人の賑わいは夏だけれども、鳥であるとか（森が賑やかなのは）冬のような気もする。静かなゆっくりとした安房川を堪能できるのは冬かもしれない。

市川：…それはかわいそうだな。俺らがはじめた頃は、夏であろうが、ゴールデンウィーク（以下 GW）であろうが、必ず貸切で、常に誰もいない安房川だったんだもんな。

松本：ホントに安房川は人がいなかったよね。

小原：太忠岳に登ったら一人おじさんが登ってきて。「人と会うなんて珍しいなぁ。5 月の 3 日とはいえ太忠岳で。」なんて話したな。

藤村：今なんて GW に屋久杉ランドに行ったら大型のバスが何台も。

小原：屋久杉ランドは昔から多かったんだよ。太忠は違う。…そういう昔話をすればいろいろあるよ。例えば縄文杉に行って「今日は凄く人が多いですね。団体を含めて 30 人はいますね。」って（笑）。

鷲尾：今はゼロがもう一つ増えていますよね。

市川：…サナのベストポイントは？ 前は他の事を言ってなかった？

藤村：ワッシー（鷲尾）に言われてしまったのですが、やっぱり照葉樹林の春。新緑の移り変わってゆく西部の森が好きですね。

鷲尾：（私も）自転車で休みのたびに西部へ出かけて行った時があったもんね。

小原：照葉樹林の新緑の素晴らしさは強調しすぎることはないね。

岡田：北海道で今年、抜群の紅葉を見たら（屋久島とは）ぜんぜん違う。当たり前なんだけど。去年が一番きれいだったそうなんですけど、今年は台風で…。でもこっちから向こうへ行ったらぜんぜん違う。

松本：俺もついこの間、清水寺で紅葉を見てきた。紅葉っていうのはこれねって、正しい紅葉を見たという感じだね。常緑の中にあるカエデと違うと思った。

小原：紅葉が凄いと思ったのは、10 月の谷川岳。沢登りに行ったんだけど、上の方は凍っているのにさ、下の両岸の、雪崩かなんかで磨かれているような岩壁が燃えるような赤だったんだよ。で、当時はわからなかったんだけど、今にして思えばあの紅葉は屋久杉の上で紅葉している種類と同じなんだ。

市川：屋久島で紅葉の一番はどこがいい？

岡田：淀川！

小原：二つあって、一つは照葉樹林ギャップ。山の上から降りてきたブナ林要素が紅葉している。リョウブとかナナカマドとか。白谷では切り株の上とか（で見られる）。そして、もう一方はツガや屋久杉が生えてこない高いところ、つまり針葉樹の森の陰にならない、森林限界…かな？タンナサワフタギ、ナナカマド、マルバヤマシグレ。ヤクスギの上とかヤクスギやツガの森より高地に生えるブナ林系のB級の連中。この 2 つだろう。

市川：A級はコハウチワカエデでしょう。

小原：まあね。でも、B級が頑張ってA級の紅葉らしいものを作っているのが高塚、高塚尾根だね。ヒメシャラが真っ赤で…、葉っぱではなく幹が真っ赤で、森の中の半分は赤く見えるんだ。ヤクスギとヤマグルマ以外は赤いんだよ、今は。ところが淀川に行くとツガがあるから緑なんだよね。秋に宮之浦岳から見ると北と南で全然色が違う。

松本：俺らは海から見ていると、あれは殆どハゼだね。

市川：ハゼはなんと言っても一月だな。

小原：台風の強い年のね。

松本：2 回目の紅葉が始まるからね。

小原：落葉樹の葉は弱いから（台風で）一回吹っ飛ばされるでしょう。その後出てきた葉が今、真っ赤。…かわいそうな気もするけど凄くきれい。

鷲尾：でも、ヒメシャラは冬ですね。あの照葉樹の緑の森の中で、寒さに吹きさらされるような裸の姿で、たくましいなぁ…って。

岡田：ヒメシャラの幹が赤いよね。

鷲尾：そう、それが凄い。夏の水に潤うヒメシャラもいいけど、冬の寒さに耐えるヒメシャラも凄く頼もしくて好き。

市川：一通り、季節ごとに出たかな？夏が出ていないんじゃないの？

松本：夏っていうのはね…。

小原：沢だよ！

松本：海もそうなんだけど…。

小原：海水なんか熱いだけなんだよ！（笑・「暴言だ」！）

岡田：でも夏の 29 度とか 30 度の水温で、「ぬるい！」っていうのも、印象的ですよね。

鷲尾：私は夏の夜の、宮之浦川の橋の上の岳降ろしの風が好きです。

岡田：雷と大雨！シーカヤックに乗ってる時、雷が真上でなる（笑）。

小原：逃げろよ（笑）。

岡田：道も何もかもが川になるくらい雨が降るのは夏。台風もだけど。

藤村：でも梅雨の最後に雷と大雨が降って、パッと夏に変わる時…。

小原：劇的だよね。

鷲尾：空気が変わるね。

岡田：毎年市川さんが梅雨明け宣言をするじゃないですか、あの時。

市川：空気が入れ替わるからな。でも夏は、木陰に入ったときの涼しさっていうのが気持ちいいよね。木陰の快適さっていうのは屋久島ならではって感じがするよね。

小原：北から南を見たときの海の色。あの青さっていうのも夏ならではなんだよ。矢筈岬で海を見ていると明らかに海の色がぜんぜん違うよね。車で走っていて「アッ！今日から夏だ！」ってわかるもんね。

市川：屋久島ってそういうのあるよね。「あっ！夏だ」とか「あっ！春だ」って季節を感じる。あまり四季がはっきりするところではないんだけども、なんだか空気の違いというか…。

松本：屋久島に住んでいろんな季節を見てきたからこそ感じられるんだね。パッと来て「夏ですね。」っていうのとは違う、もっと微妙なグラデーションのような移り変わっていくものを感じられるのは私達ですよ。

【ベストタイム】

市川：それでは次は時間帯。朝はここがいい、昼はここがいい、夜は「若竹（お食事処）」がいいっていうのは（笑）？

小原：早朝の西部林道でしょう、真夏の！ まず精神的に清清しい。

岡田：朝は、冬近くになってきたときに日が短くなって、登山に行く時、ドライブしていると見える真っ赤な丸い朝日。

市川：冬の麦生辺りの朝はいいよ。畑総の辺り。海に向かってみると北半分から雲がきて、南から日が射している、それが丁度交差して雲の間からサーッと光の帯が必ず出るのがとても美しい。

岡田：それで真昼の、ちょっと夕方ががかった頃かな、海に映る雲の影が好き。夕日に変わる前の、大川の滝のほうに向かって降りる時の坂（から見える景色が一番いい）

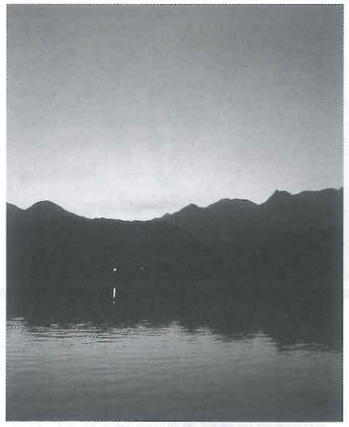
市川：真昼の海が穏やかなときの、海に映る白い雲。

鷲尾：積乱雲がボコボコボコっていう風に見えるとき。

市川：夕方は？

小原：夕方の西部林道から見る、観音崎越しの口永良部。

市川：満月の時の、光る海はきれいだよね。



【夕暮れの安房川】

小原：瀬切の満月。

市川：雨の夜はね、ヒキガエルが凄い。ヒキガエルの産卵は 11 月がベストシーズンだね。とにかくヒキガエルをよけて通らないと車が走れないっていうくらい（笑）。

岡田：（夕方の）光った海面に雲の影が黒く映って、地図のようになる（風景が好き）。

小原：同じタイミングで口永良部から見た屋久島。これは神々しいぞ。

鷲尾：夕方の冬の安房川。

市川：夏の夕暮れ時、橋の上から見たときに流れ舟の光が上流のほうでついているのはなかなか美しいよね。夜は？…星空もきれいだよね。星を見るにはどこがいい？

小原：星はなぁ…。星座なんかわからないから。

市川：星があまりにも多すぎて星座が読み取れない、ということね。

【屋久島堪能コース】

市川：最後に究極の屋久島堪能コースというのは？ 屋久島を一筆書きで行くとすると？

鷲尾：まず、YS-11 で降り立って…。

市川：いや、空港に降り立つのは良くないよ、船で来ないと。フェリーだよ。まず宮之浦に降り立つ。

松本：フェリーで降り着いたら、すぐに太陽丸に乗り換えて口永良部に行きたいよな。

市川：まず、口永良部にいこう。

小原：フェリー屋久島 2 で（昼）12 時に屋久島に着いたなら、1 時の太陽丸に乗って口永良部へ行くわけだ。

松本：口永良部に着いたら 3 時か。着いたら寝待に行って、ちょっと夕暮れの海を潜って、温泉に入って民宿に入るんだ。

市川：2 日目は…、まずは温泉に入るか（笑）。

松本：…それから湯向（温泉）に行って、新岳に登って古岳に行って七釜に降りて、西之湯（温泉）に行こう。

岡田：民宿に近い西之湯は、近いから朝に入っておきましょう。

市川：朝、西之湯に入って湯向に入って帰ってくる。その日は三岳におぼれる（笑）。

岡田：（翌日は）昼船だから朝から泳いで…。

松本：朝は釣りやな。釣りをしよう。カメノテ・イソモン取りをして、釣りして、昼の 3 時の船で屋久島に帰ってくる。帰ってくるのは 5 時だな。それから楠川温泉（笑）。

市川：楠川の海岸でキャンプ。それから楠川歩道を登るわけだ。楠川歩道から白谷雲水峡に入って…。

小原：太鼓岩で夜を過ごす。

市川：月光浴で宮之浦岳を眺める。

小原：次の日は早めに降りて、小杉谷に行って朝 9 時半までには縄文杉に行かなきゃいけない。

松本：やっぱり人のいない縄文杉に出会えるっていいよ。

藤村：高塚…新高塚まで行きましょう。

小原：新高塚までいけば宮之浦岳のほうに行くしかないな。その先は一回花山に下ろう。11 時に宮之浦岳山頂、12 時半に永田岳山頂、鹿の沢に下りて、大川の源流に下りる。

鷲尾：早い！早すぎる！！

小原：では、一泊しよう。新高塚…いや、キソの岩屋にしよう。ここは誰も知らない、素晴らしい岩屋なんだ。

松本：半日くらいゆっくりしてもいいな。

市川：鹿の沢から花山に下る。花山広場でキャンプがいいよね。

小原：小楊枝川に下ろう。

松本：小楊枝川を下って栗生に出てシーカヤックで西部を漕ぎたいな。

小原：青少年旅行村で夜、サンゴの産卵を見よう。

市川：西部はシーカヤックでいいの？MTB で抜けたいんじゃない？ 青少年旅行村からシット・オン・トップ（カヤック）に乗って、七瀬に行ってダイビングをして。それから大川の滝でスノーケリングをして、滝登りをして、そこからシーカヤックに乗って（西部）川原で上陸して…。

小原：海岸古道だったらマンキチ（万吉谷）だな。

市川：海岸古道を歩いて、終わったところから MTB に乗り換える。

岡田：これを一日でやるんですか？ 森の中で泊まりましょう。

市川：大川（の滝）の浜で一泊しよう。

松本：日が沈むのがいいぞ！

市川：大川から船出してマンキチに行って川原を上がってMTB。半山までいくんだ。半山で海岸に降りてシーカヤックで永田の灯台を回る。

鷲尾：マンタを見ながら。

市川：そして、田舎浜…いや、永田の河口に入ろう。

鷲尾：もう一回、泊まりたいですよね。

市川：それなら永田歩道に入ろうか。

小原：永田川を登って大障子から永田岳まで藪をこいで行こう。そこから一気に南下。湯泊歩道を行こう。翁岳、安房岳、投石岳、黒味岳…烏帽子岳、七五岳を全部登ろう。

市川：どこで泊まる？

小原：シモの岩屋で一泊、カシラの岩屋で一泊。登ってワレノ岩屋で一泊だな。

市川：それで湯泊歩道を下りて湯泊温泉か。湯泊温泉に行ったらシーカヤックに乗りたいよね。湯泊から尾之間辺りのシーカヤック（からの眺め）は美しいんだよ。そして、尾之間温泉に入る（ここで一泊）。それから、蛇の口滝へ登って尾之間歩道を登って、屋久杉ランド？

岡田：それなら花之江河まで行って、花之江河歩道を下って屋久杉ランドへ降りる。

小原：淀川へ行って安房川の沢を下ろう！

岡田：安房から小瀬田までは田代海岸を（シーカヤックで）漕ぐ！

市川：安房から田代までは自転車で、MTB で回りながらいこう。その後はシーカヤックで小瀬田まで行き…。

鷲尾：YS-11 で帰りましょう！（笑）

【座長後記】

どうも屋久島に住んでいる人間が話すと微妙なタイミング・空気の変化に感動していることが多いようですね。ということは 1 度や 2 度屋久島に来たって本当の感動を味わうにはまだまだだっていうことではないでしょうか？さて、我こそは屋久島一筆書きに挑戦したいという猛者は、是非御一報下さい。何日かかるかわかりませんが！

【虹とモッチョム岳】

自然くらぶ 海部

＊前編＊

いざっ！屋久島一周だ！

海部とは、一昨年自然クラブの中に発足したシーカヤック部門のことである。自然クラブは 5 年前に発足した屋久島在住の方々対象の地域還元型プログラム。それも、もう 4 年目に突入したことだし、山が中心だった活動を海にも広げよう！という事で、ダイビングクラブと共に立ち上がったのが海部である。

当面の目標は“屋久島一周！”。とは言え一日で一周できるほど屋久島は小さくない。しかも、形が丸いこの島は、逃げ込む入江が少ないばかりか、吹いた風は例え中央にそびえる大きな山々が受け止めようとも、周りこんでは島陰をも時化させる。そう言ったわけでこの企画、自ずと少数精鋭となり、仕事の合間となれば時間はかかるが、漕いだ範囲をこつこつ広げて行くしか他ないのだ。

そして一昨年 9 月の第 1 回以来今度で 12 回目を迎える海部。まだ屋久島一周にはとどかないまでも、丸い屋久島を時計に例えると、3 時（安房）から南回りで 12 時（一湊）までを制覇した。あと北東部だけならもう少し！とは言え、風向き次第で残りをいつ走破できるかわからない。そこで、途中ながら発足 1 年を機に、今回は「海部　前編」として西半分の「海部の軌跡」を紹介する運びとなりました。参加した皆さんの率直なコメント集です。

部員紹介

市川聡（部長）、岡田愛（編集長）、藤村早苗、鷲尾紀子、樫村精一、佐藤崇之、長谷川りえ（以上YNAC）、会田淳一、古賀顕司、水柿英徳、和田裕介、砂川聡、井坪美紀、加地英史（以上ガイド仲間）、村松佳子、宮崎時男、溝口健太郎、白浜裕樹（屋久島在住の方々）、その他特別ゲストあり。

壱、湯泊から中間

2003／9／17 ☀時々☘ 北西のち北の風

記念すべき第 1 回海部は初回にふさわしい晴天のベタ凪。南部でこれほど穏やかなのはめずらしい。海食洞窟や小さな瀬が連発する面白いコースなのだが…。

会田淳一

このコースは湯泊の 4 連洞窟が圧巻で思わず大興奮。自然の圧倒的な力を感じました。

そして何と言っても市川さんが岩礁に打ち上げられたことが印象的。陸にあげられたアザラシのように無力に見えました（笑）。市川さん、腹の底から笑わせて頂きました（感謝）。岩礁には注意！肝に銘じました。

岡田：そうそう、初回でいきなり部長が座礁（表題左）。知ってか知らずか、その横を帆を立てて悠然と進む時男さんも印象的でしたけど。

弐、中間から栗生川　往復

2003／11／26 ☘一時☂ 北東の風

中間から見える“七瀬”にかぶる波の様子は時化具合のバロメーター。この日は時化てるけど何とか行けると判断。行ってみることに。

古賀顕司

中間についたとき、海はそんなに荒れているようには見えなかった。防波堤で地元のおばちゃんが秒殺で晩のおかずの魚を釣り上げているのを横目にしつつ、僕らは七瀬にむかってえっちらおっちら漕ぎ始めた。

七瀬に近づくにつれうねりがビッグになってきて、となりの艇が見えないくらいだった。そんなこんなで七瀬を回り込んだら、今度は潮の流れが速くてぜんぜん進まない。隣の会田さんと「さっきから全然景色かわらないねー」とぼやきながら、内心ここではぜって一沈なんてしたくないと思っていた（和田君もそうだったみたい）。

何とか七瀬を気合いで突破！一気に栗生の河口に避難だー。上陸していつものたき火。市川さんが釣ったギンガメアジを焼き、砂川さんが拾ってきたイソヒヨドリも焼いてみんなで食べた。中間に向けて、帰りは速い！潮の力はすごいっす！今回は海の力を実感しました。

岡田：この日は海部 3 回目にしてこの時化を皆良く漕ぎました。二日酔いか怪しいところですが、「撒き餌」に苦しんだ人もいましたしね。私は栗生川ではじめて「ヤマセミ」発見。感動の一日でしたけど…。

参、永田から大川河口

2004／2／20 ☀ 東の風

このコースは海まで花崗岩がそそり立つ屋久島でも特に険しい断崖地帯。急峻な地形が海中まで続く、深くて潮も速い海域だ。冬は北西の季節風で時化やすいが、2 月下旬ともなると、時々北風が弛んで春の顔を覗かせる瞬間がある。東風快晴、意気揚々と進むメンバーに、後方から“すなやん”こと砂川さん曰く、「サメがあいちゃんの艇追っとるで…」「うそぉ！！」

加地英史

僕は、初シーカヤックだったので市川さんとタンデムで行動した。「灯台の辺りは流れも早いし、サメもいるよ」なんておどかされたりもした。いつもは陸から海を眺めているが、この日ばかりは海から陸を、ダイナミックな海岸線をなぞって眺めることができた。シーカヤックの醍醐味だ。「あんな所に昔の道が？！」と新しい発見を多々楽しみ、波のすきをついて岩間をすり抜けて漕ぐスリルを楽しみ、プカプカ浮いているウミガメに遭遇し、あっちでは「サメだ～」こっちでは「カジキだ～」と叫ぶ声もあり…。

7 年間屋久島に住んでいるが、まだまだ知らないこと、面白いことがたくさんある。屋久島の素晴らしさと、自然の奥深さを改めて感じられずにはいられない一日となった。最後の方で体は酔ってしまったが、魂はコロコロと喜んでいる気がした。また行きたいなぁ…凪なら。

岡田：会田君の横をマンタ？ が飛び跳ねた時は本当にびっくり！カヤックより大きかった。しかも、サメって本当に背びれ出して泳ぐんですね（笑）。笑い事じゃないか…。

四、栗生から大川河口　往復

2004/3/24 ☘一時☀ 北東のち北西

栗生川の河口から遠く七五岳を望み、塚崎をまいて大川の河口を目指すコース。海に手を浸すとほのかに暖かく、塚崎を猛烈な速さで流れる潮に向かって漕ぎ出せば、屋久島が黒潮の直中にいることを最も実感できるコースだ。潜れば屋久島一のサンゴ礁を有する栗生沿岸。大川の滝は見えないけどね。

伍、一湊から吉田

2004／4／17 ☀のち☘ 南東の風

6 回目にしてようやく北部を漕ぐ。北風すさぶ冬が終わった証拠だ。矢筈の神様に航海の安全を祈願して、遠くに硫黄島や竹島を望み往く。上陸したせんろく鼻周辺は、サンゴ礁が美しい絶好のスノーケリングポイント。

佐藤崇之

初めてシーカヤックに乗った 4 月の海部。出発してすぐにビールを飲み始め、釣り糸を垂らす市川。海から見える屋久島の雄大さを熱く語る鷲尾。屋久島に来てひと月、ついに海デビューである。みんな思い思いに海を楽しんでいる。その姿がかっこよかった。

昼は岸に船を着け海に潜り食料採集。採ったものを持ち寄ってそれをつまみにビールを飲む。お日様の下で焚き火とビール。もうそれだけで十分である。海部サイコー！！

六、麦生から尾之間

2004／5／11 ☀ 北西の風

常にモッチョム岳を望み、鯛の川河口（トローキの滝）を真近で望める絶景コース（下写真）。中々凪ぐことが少ない鬼門コースでもある。

溝口健太郎

「チンしないだろうか？」とか「きちんと漕げるだろうか？」など色々な心配もあっての初シーカヤックでした。ただ、海に出てみると感動！我が家のそばを漕いでいったのですが、普段は見慣れている山々も、海面ぎりぎりからみるとまた違った迫力があって新鮮で・・・。

海と山をいっぺんに満喫！屋久島の自然の深さを改めて感じさせてもらいました。YNAC、参加した皆様、屋久島に謝謝！！

岡田：この日は参加者 10 名の大所帯。天気も最高！たまにはにぎやかなのも楽しいよね。

七、吉田から永田

2004／6／15 ☘ 東の風

屋久島が誇る美しく白い砂浜と、巨大な花崗岩壁を横目に漕ぐコース。四つ瀬の浜に上陸。すると釣り糸を垂らす軍団から歓声が！

和田裕介

海部の参加は合わせて 4 回。いつも感じることがある。なんてハードなクラブなんだ…。自分が海部に行くときはなぜか、いつも海に白いウサギが飛び跳ねている。

昼食に花を添えるため、毎回釣り竿を船に載せている。シーカヤックから魚を狙う。つれた魚はカンモンハタという魚。最高だー！近くの砂浜に上がりまた釣りをする。今度はコバンアジという魚がみんなの釣り針に食らいつく。釣った魚を焚き火で調理。そして魚に食らいつく。焚き火を囲みながら幸せなひとときが流れていく。

幸せの後には、厳しいことがやってくる。うねる波間を永田へ向けて漕ぎ出した。シーカヤックで屋久島の大海原に漕ぎ出す。まるで海に浮かぶ木の葉のように波にもまれ少し不安になる。そんな時、市川さんとあいちゃんのゆるい顔を見ると安心してまた漕ぎ出せる。これを繰り返して目的地まで必死に漕ぐ・そして漕ぐ・ひたすら漕ぐ。目的地に到着すると達成感に感激。そして俺よくがんばった！とほめてあげている。

次回の海部は、鏡のような海でありますようにと毎回願っている。

岡田：釣り糸を垂らすと酔ってしまうので、いつも携帯しながら釣竿を使えない和田君。釣れた時のあの嬉しそうな顔は、今までで一番の笑顔じゃないでしょうか、フフ…。

八、尾之間から湯泊

2004／11／17 ☘ 北東の風

平内の海岸線は、スパッと切れた堆積層の断崖がそこら中で飛び出す特に地形がダイナミックなコース。見ごたえあり！

藤村早苗

天気は上々。尾之間の港から見る海も穏やか、でも少し波打ち際に波が白っぽい。久しぶりに出た南の海は深い青一色で、果てしなく続く。太陽の光が波間を照らし、その間をシーカヤック隊が悠然と進む。平内に差し掛かると海岸線は堆積岩が海へせり出し、不思議な様相を呈し、その合間にできた洞窟を探検！…と思いきや、波が高くて敗退。

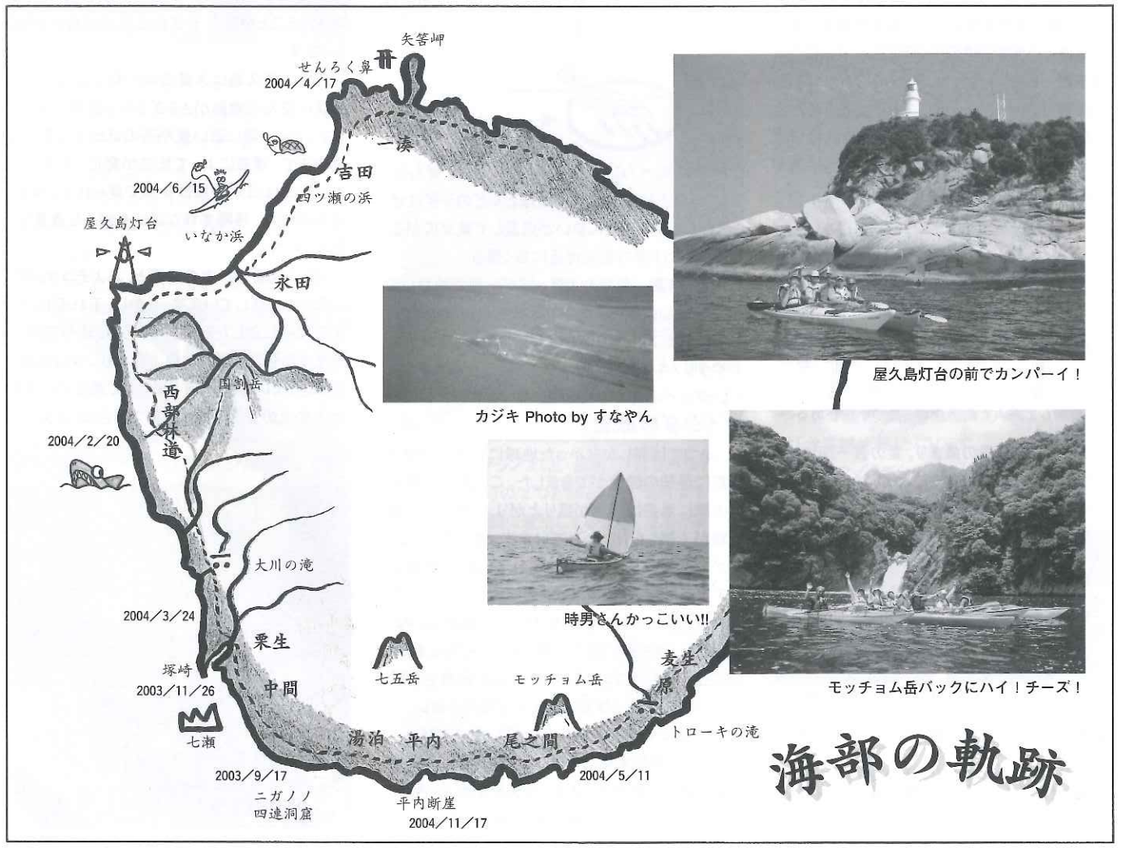
お昼にはまだまだ暖かい南の海で、恒例のイソモン取りに興じ、焚き火でイソモンを焼く。焦げた醤油のにおいの立ち込める浜で腰をおろし、みんなといる幸せな時間…。そこへ「焼けたぞ！」の一言にイソモンの争奪戦へと乗り込む。こんな幸せな時間が、素敵なつながりがいつまでも続きますように。

岡田：ここまで場数を踏んできただけの事はある。みんな少々の波では驚かなくなりましたね。しかも、普通に泳いでるけど 11 月ですよ！

市川部長から一言

こうして振り返るとめちゃめちゃ楽しかったですね。そもそも海部は、シーカヤックだけが目的ではなく、シーカヤックを使って、海をとことん楽しむのが目的。幸せな部ですね。

中核メンバーも育ってきたので、少しずつ部員を増やしていきたいと思います。我こそはと思う方は、声をかけて下さい。



シダの話と、白谷雲水峡のシダ

樫村精一

今や、白谷雲水峡は美しいコケの森として魅力を放ち、屋久島観光のメッカとなっています。岩の上から枝の先まで生えるコケの緑は、光や雨など、刻一刻と移り変わる状況にさまざまな表情を返し、いつまでも「枯れ」を感じさせません。この風景に我々日本人は我が身の儚さや一生の短さを偲び、どこか寂しさを感じる美しさに心魅かれてきたのだと思います。

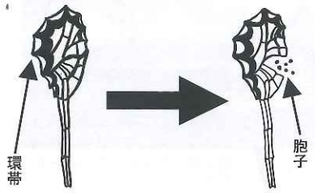
しかし残念なことに、屋久島でコケに並ぶ多様性を誇る「シダ」については、特に注目が無いように思われます。コケよりは識別し易い、といっても花の咲かないただの草なので、やはりどれを見ても同じように見えます。これでは関心を引かないのも無理はありません。

しかし、彼らにも注目すべき繁殖のカラクリや、理にかなった美しい形態があるのです。今回は皆様により一層「シダ」を身近に感じていただきたく、白谷雲水峡によく見られるシダ、そして彼らの歴史や生き様を見てゆこうと思います。

〈シダことばの基礎知識〉

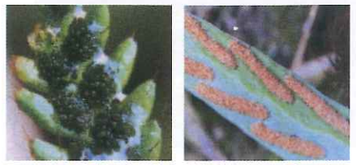
胞子…胞子はシダの種のような物で、胞子嚢（ほうしのう）という袋に入っている。0.05 ㎜ぐらい。肉眼ではまず見えない。胞子は発芽して、前葉体という生殖器官になる。

胞子嚢…胞子の入れ物。袋状のもので、周囲に環帯（かんたい）というものがある。環帯とは蛇腹のホースで、水が入っているうちは伸びていて、乾燥すると縮む。環帯が縮むと胞子嚢が引き裂かれ、中の胞子が飛び出してゆく。



乾燥して割れた胞子嚢から胞子が飛び出る

ソーラス…胞子嚢の集まり。葉の裏一面に広がったり、一本線に伸びたり、曲がったり、丸くなったりする。シダの分類に欠かせないもの。



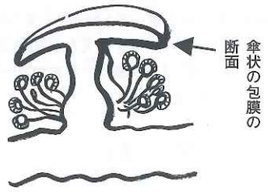
ソーラス（左・オオクボシダ　右・サジラン）

鋸歯（きょし）…葉や包膜の縁が、ギザギザしている様子。

全縁（ぜんえん）…葉や包膜の縁が、つるんとしている様子。

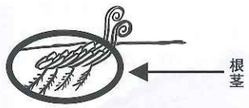
包膜（ほうまく）…ソーラスを包む膜。色は種類によって違う。赤・黒・白・緑・ツートンなど多様。

ベニシダの若い包膜



包膜の断面図。付け根にソーラスがつく。

根茎（こんけい）…シダの根と茎は一体化して地下に潜っている。直立したり這い回ったりする。イモのように何かを蓄えているわけではない。



鱗片（りんぺん）…シダの芽、いわゆる「ぜんまい」を守る鱗のようなもの。ほとんどのシダはぜんまいを作る。ぜんまいが成長して葉が広がると、鱗片は葉の根元付近に多く残る。

単葉・複葉…単葉とは葉っぱが一枚で独立していること。複葉とは小さな葉が集合して一枚の葉になること。サクラやカエデは単葉、センダンやタラノキは複葉です。シダと言えば複葉を思い浮かべる方が多いと思います。

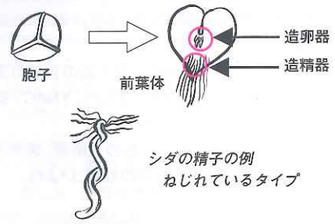
〈シダの歴史〉

かつては海しかなかった地球にも、約 40 億年前に最初の陸地ができました。ここ最近 5 億年の間に活発に陸地が盛り上がり、4 億年前に植物が上陸したといわれています。陸が広がり山ができると、そこは水から離れてしまい、乾燥します。上陸した植物は、勢力拡大のためにこの乾燥を乗り切る必要がありました。海岸沿いなら暖かく雨も多いのですが、それでも常に水が存在するわけではありません。この困難を克服し、背を伸ばし、体重を支えて太陽光を奪い、わずかな水で生活できる種が残ったのです。

空中に身体を伸ばすと、上に向かって水や栄養を送る必要があります。シダを含め、大きな植物はこのための「維管束（いかんそく）」というパイプを持っています。これを獲得したおかげで、植物は地上で大きくなれたのですが、ようやく上陸した最初の植物は維管束が無く、小さな体でした。今でもコケには維管束がありません。この点がシダとコケを分けるポイントです。

〈シダってどんなモノ？〉

シダの特徴を一言でいうと「胞子で増える維管束植物」です。胞子は発芽して「前葉体」という幅 1 ㎜程の緑色の葉のようなものになります。



前葉体は造精器で精子、造卵器で卵子を作り、これらが受精して次世代のシダができます。

ただし、受精には水が必要です。精子と卵子は自家受精しないように成熟の時期がずれていて、ある前葉体の精子は別の前葉体の卵子まで移動しないといけません。精子は雨や露の中を動くので、繁殖については水中生活に近い状態が残っています。つまり、前葉体から新個体が発生する条件は「日陰の多湿な場所」に限定されることが多く、シダの生息域は意外と狭くなります。

しかし、屋久島は大量の雨や霧で湿度が高く、起伏に富んだ地形がさまざまな日照条件を作ります。さらに海に近い亜熱帯の低地から寒冷な高山まで、標高によって気温が変化します。つまり、ここは日本のほぼ全域で見られるシダが生息可能な、多種多様な環境を備えた貴重な島なのです。

シダは地面・岩・木の表面と、およそコケと同じ場所で生活しています。しかし、それぞれの生活場所に適した形があるようで、岩や樹木に着生するものは単純な形、地上のシダは複雑な形をしているようです。まずは、着生のシダと地面の上のシダに分けて見てゆきましょう。

前葉体（下）から発芽したシダ本体（上）

〈岩や木に着生するシダ〉

着生は地面から離れた生活スタイルで、メリットとして「日当たりがいい」、デメリットとして「水不足になりがち」という点があります。水不足は陸の植物にとって避けて通れない問題ですから、うまくこれを解決しなければ滅んでしまいます。

幸い、屋久島の暖かく湿った環境では水不足になる事は少なく、着生を容易なものにして、多様なシダの生育を可能にしています。

着生シダは単純な形のものが多いので、よく観察してください。名前の横の漢字表記で、少しはイメージしやすくなると思います。

1)ヒメノキシノブ（姫軒忍）
・・ウラボシ科ノキシノブ属

2)タカノハウラボシ（鷹の羽裏星）
・・ウラボシ科ミツデウラボシ属

これらはウラボシ科というグループの一員で、葉の裏に星のような丸いソーラスをつけます。漢字だと「裏星」です。どれも乾燥すると葉を丸めて小さくなってしまいますが、耐久力は高く、水があればよく復活します。外見よりも中身を見るとなかなか複雑な葉脈で、広い葉をグッとまとめて小さくして、乾燥に耐えようとする姿勢が見えます。

3)サジラン（匙蘭）・・ウラボシ科サジラン属

4)ヒトツバ（一つ葉）・・ウラボシ科ヒトツバ属

この 2 種もウラボシ科ですが、サジランのソーラスは細長く、ヒトツバのソーラスは裏全体に広がります。どちらも樹の上に着生しますが、台風の後には、コケごと地面に落とされた彼らをよく目にします。

5)マメヅタ（豆蔦）・・ウラボシ科マメヅタ属

マメヅタの葉は普通丸い（**写真上左**）のですが、胞子のつく葉（**写真上右**）は細長く、光合成と繁殖の担当が分かれています。

6)シシラン（獅子蘭）・・シシラン科シシラン属

イネの穂のように幹から垂れ下がる、濃い緑のシダ。ごく普通に見られます。一度見たら忘れません。獅子のタテガミに見立てたとか。ソーラスは葉の縁に巻き込まれてしまいます。

さて、着生シダのすべてが単純な葉ではありません。複葉の着生シダもあります。しばしばコケに間違えられる「コケシノブ」、そして愛好家も多い「シノブ」の2つをご紹介します。

7)コケシノブ（苔忍）・・コケシノブ科コケシノブ属

「**コウヤコケシノブ**（左・鋸歯）」「**ホソバコケシノブ**（右・全縁）」の 2 つがほとんど。彼らは手に届くあらゆる範囲に着生しています。なんと葉の厚みは細胞 1 層分しかなく、裏が透けて見える薄さ。おかげで乾いても少しの水で元通り。

8)シノブ（忍）・・シノブ科シノブ属

よくモミやツガの枝につくシダですが、白谷雲水峡入口の橋のたもとで頑張っているシノブがいます。土のない環境に耐えて忍ぶ様子からシノブと呼ばれるとか。台風の後は、枝ごと地面に落とされ、さらに葉も吹き飛ばされて哀れです。根茎は白い毛に覆われて暖かそう。これは湿度を保ち、保水力を増すカラクリです。

着生シダの多くは丈夫で厚い葉を持ち、乾燥に耐え、湿った空気を求めてじっくり生きている種が多いことがわかると思います。

〈地面の上のシダ〉

地上生のシダは、多くが複葉を持ちます。オシダ科というグループが多く、照葉樹林に重なって分布し、多様な種が見られます。

9)ベニシダ（紅シダ）・・オシダ科オシダ属

朝鮮・中国から本州以南、トカラ列島まで分布し、どこでも雑草のように生えます。若い葉は全体が紅色なのでベニシダと呼ばれます。

10)タカサゴシダ（高砂シダ）オシダ科オシダ属

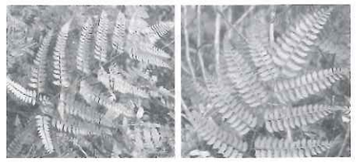
高砂とは台湾のこと。台湾原住民のことを高砂族と呼んだ歴史にちなみます。南シナ海に浮かぶ台湾は屋久島と同じ山岳島で、非常にコケやシダが豊富な照葉樹林があります。中国語では「台湾鱗毛蕨」となります。

11)ミヤマイタチシダ（深山鼬シダ）
・・オシダ科オシダ属

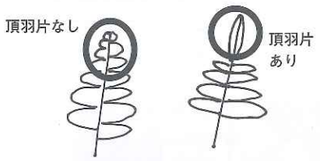
ソーラスは、葉の上部から下に向かって発生し、一番下の付け根にはソーラスが出ません。

ベニシダ・タカサゴシダ・ミヤマイタチシダは白谷雲水峡に最も普通に出るシダです。ベニシダは葉の形に変異が多く、見分けが難しいこともありますが、他の2つは簡単に発見できます。

12)ヤクカナワラビ(屋久金蕨)
‥オシダ科カナワラビ属



ヤクカナワラビは金属光沢があり、葉が堅く、頂羽片という特徴的な形を持ちます。



「オシダ科」グループは熱帯を中心に世界中に分布して、日本ではオシダ属・イノデ属に最も多くの種があります。簡単に雑種を作り、この識別は難しいので、今回は簡単確実なものだけを紹介しています。

標高の高い、開けた涼しい所には、**コバノイシカグマ**という柔らかいシダが群落を作ります。

13)コバノイシカグマ(小葉の石カグマ)
‥コバノイシカグマ科コバノイシカグマ属

優しげな緑で全身に柔らかい毛が生えて、触り心地のよいシダです。

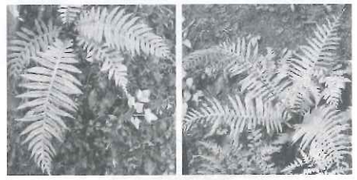
14)イシカグマ(石カグマ)
‥コバノイシカグマ科フモトシダ属

白谷雲水峡『いこいの大岩』手前の橋のたもとなど、やや目立たない所にあります。石のごろつく場所に多い、という事でしょうか。屋久島では里のほうに雑草的に生えます。葉の裏に葉脈がしっかり盛り上がり、薄く毛が生えます。

「カグマ」とはシダの古名です。「日本書紀」に、「越の国(新潟)より燃土燃水たてまつる…」とあり、天智天皇に燃土燃水、いわゆる「原油」を献上した記録があります。採取地は黒川村とされています。原油自噴池を「臭水(くそうず)坪」と呼び、燃水祭なるものが催されます。式では、かさ・わらじ姿の男性が、シダを束ねた「カグマ」を臭水坪に浸し、カグマに染みた真っ黒な原油を素手で搾り、かめに移し替えて天智天皇をまつる滋賀県の近江神宮に献上します。ここで使われる「カグマ」はリョウメンシダというシダですが、残念ながらリョウメンシダは屋久島にはありません。(光田・永益 1984年の調査。)

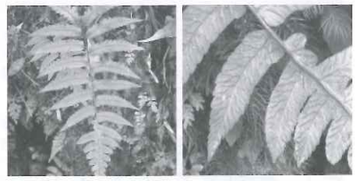
15)写真下左　オオキジノオ(大雉の尾)
16)写真下右　タカサゴキジノオ(高砂雉の尾)
‥(どちらも)キジノオシダ科キジノオシダ属

17)シマヤマソテツ(島山蘇鉄)
‥キジノオシダ科キジノオシダ属



この 3 つも頻繁に白谷雲水峡コース内に現れます。葉はしなやかで厚く、葉の様子も簡単でわかりやすいシダです。胞子をつける専門の胞子葉を出します。体の中心から真上にすーっと伸びる胞子葉をご覧になった方も多いのでは？雉の尻尾に似ていると言われますが、確かに尾羽根の黒い部分に似た葉の形ですね。

18)ミヤマノコギリシダ(深山鋸シダ)
‥イワデンダ科ヘラシダ属



複葉のシダで、かつソーラスが線形という、白谷では少数派のシダ。歩道沿いで見かけます。

〈ヘンな形のシダ〉

地を這うような変わった形。見た目が変わっているので覚えやすいと思います。

19)ヒカゲノカズラ　(日陰の葛)
‥ヒカゲノカズラ科　ヒカゲノカズラ属

古事記にある、天宇受売命(アメノウズメ)と天照大神(アマテラスオオミカミ)の話をご存知ですか？　スサノオの悪行に嫌気の差したアマテラスは岩戸に隠れ、地上が暗闇に覆われます。何とかアマテラスを引っ張り出そうと、アメノウズメは裸になってこれを体に巻いて踊り、他の神と共に大いに騒いだところ、作戦通りアマテラスがひょっこり顔を出して覗いたので岩戸をこじ開けたと言う話。古事記では「天の日陰」とあるのが、このヒカゲノカズラです。

20)オニクラマゴケ(鬼鞍馬苔)
‥イワヒバ科イワヒバ属

歩道沿いにある変な形のシダ。先端が細くなると、そこには胞子ができています。

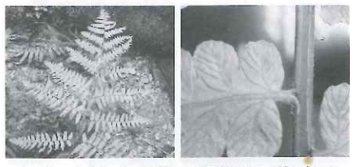
21)ヒメハシゴシダ(姫梯子シダ)
‥ヒメシダ科ヒメシダ属

歩道の階段や木の根の隙間など、湿った暗い所が好き。小さいながらも群落を作ります。全長は 3cm ぐらいです。

〈水辺・川沿いのシダ〉

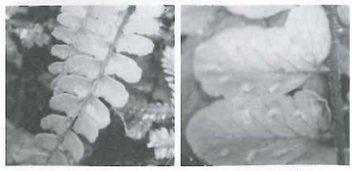
白谷雲水峡の中央には白谷川があり、その両岸の森には白谷川に流れる何本かの支流があります。その周辺は常に湿っていて、ぬかるむ場所も多く、特徴的なシダが生えています。

22)コクモウクジャク(黒毛孔雀)
‥イワデンダ科ヘラシダ属

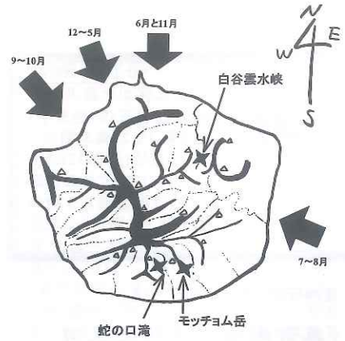


川沿いの湿った場所に、根茎を長く伸ばして群落を作ります。鱗片は黒く、毛のように細いのでこのような名前がついています。

23)ヒメホウビシダ(姫鳳尾シダ)
‥イワデンダ科メシダ属



全長 10cm ほどの小さいシダですが、「鳳凰の尾」というロマンティックな名前。沢沿いの大きな壁には必ず見られます。



〈シダを探そう〉

屋久島ではどこでもシダが生えています。海岸から山頂まで、至る所にいろいろなシダがいます。これまでは白谷雲水峡に普通に見られるシダを紹介してきました。ここからは屋久島の特徴とシダの分布について見ていきます。

上の図の矢印は、屋久島に吹く風の季節性を示します。三角形は 1000m を超える山、太い線は山の稜線、細い点線は谷や川です。東西に伸びる山が白谷雲水峡で途切れます。標高 680m の白谷は南北の風の通り道となり、ほぼ一年中風が吹き込み雲が湧きます。

白谷の年平均気温は約 15℃、年間降水量 7000 ㎜の温暖多雨な環境ですが、昭和半ばまで伐採が入っており、細い木が多いように見えます。ここで私が確認したシダは 45 種ですが、歩道沿いに見ただけなので、沢沿いに奥に入ればもっと多くの種が見つかるはずです。

シダやコケは北向きの沢沿いに多いと言われますが、屋久島ではモッチョム岳付近、蛇の口滝などに非常に多様なシダがあります。シカの少ない所には多くの植物が生えるらしく、特にモッチョム岳周辺の森は急な斜面の上にあり、シカが少ないのだろうと考えられています。では、シカの多いところは？　これは島の西側の西部林道付近で、シカの口が届きそうな所にはあまり植物が無く、シダも限られた種類しかありません。

西部の森では**ホソバカナワラビ(下写真左)**が目立ちます。他にタマシダ、コシダ、カツモウイノデが現れる程度ですが、樹上など、シカの届かない所には**オオタニワタリ(下写真右)**という鳥の巣のような大きなシダが着生します。

中国名「巣蕨」、英語名「bird's nest fern」、どちらも鳥の巣を表します。多くのシダ類は根に共生菌を持つことが知られていますが、オオタニワタリをはじめ、着生で育つシダは前葉体の時から菌に依存しています。

今回は白谷雲水峡を中心に、シダの基本的な事柄と屋久島のいくつかの種を紹介しました。今後もシダにスポットを当てて、様々なシダの生態や動物との関わりを見ていこうと思っています。

白谷雲水峡で見たシダ　45 種のリスト

科名	種名	生える場所
ヒカゲノカズラ科	ヒカゲノカズラ	歩道沿い
ヒカゲノカズラ科	トウゲシバ	歩道沿い
イワヒバ科	オニクラマゴケ	歩道沿い、 涼しい日陰
イワヒバ科	カタヒバ	岩の上
キジノオシダ科	タカサゴキジノオ	歩道沿い、 涼しい日陰
キジノオシダ科	オオキジノオ	歩道沿い、 涼しい日陰
キジノオシダ科	ヤマソテツ	歩道沿い、 涼しい日陰
ウラジロ科	ウラジロ	崩壊地
ウラジロ科	コシダ	崩壊地
コケシノブ科	ホソバコケシノブ	樹上
コケシノブ科	コウヤコケシノブ	樹上
コバノイシカグマ科	コバノイシカグマ	歩道沿い、 涼しい日陰
コバノイシカグマ科	イシカグマ	歩道沿い、 明るい場所
コバノイシカグマ科	ユノミネシダ	歩道沿い、湿った場所
コバノイシカグマ科	イワヒメワラビ	水はけのいい明るい場所
ホングウシダ科	ホラシノブ(ヒメホラシノブ？)	痩せた、明るい場所
ホングウシダ科	ホングウシダ	水の滴る　湿った場所
ホングウシダ科	エダウチホングウシダ	地上性
シノブ科	シノブ	樹上
シシラン科	シシラン	樹上
イノモトソウ科	ナチシダ	水はけの悪い明るい場所
チャセンシダ科	ヤクシマホウビシダ	水の滴る湿った場所
チャセンシダ科	ヌリトラノオ	土の上
ヒメシダ科	ヒメハシゴシダ	土の上
シシガシラ科	シシガシラ	歩道沿い、 階段付近
オシダ科	ヤクカナワラビ	歩道沿い、 涼しい日陰
オシダ科	ヨゴレイタチシダ	歩道沿い、 涼しい日陰
オシダ科	ベニシダ	歩道沿い、 涼しい日陰
オシダ科	ミヤマイタチシダ	林道の壁、 涼しい日陰
オシダ科	カツモウイノデ	歩道沿い、 涼しい日陰
オシダ科	イノデ	石垣や木道の下
オシダ科	タカサゴシダ	歩道沿い、 涼しい日陰
イワデンダ科	ヤマイヌワラビ	歩道沿い、湿った場所
イワデンダ科	ミヤマノコギリシダ	歩道沿い、湿った場所
イワデンダ科	コクモウクジャク	明るい沢沿い
イワデンダ科	ヘラシダ	岩・樹木・崖
イワデンダ科	ヒメホウビシダ	岩・崖
ウラボシ科	ノキシノブ	岩・樹木・崖
ウラボシ科	ヒメノキシノブ	川沿いの岩
ウラボシ科	ヒメタカノハウラボシ	川沿いの岩
ウラボシ科	マメヅタ	樹上
ウラボシ科	ヒトツバ	樹上
ウラボシ科	タカノハウラボシ	岩・樹木・崖
ウラボシ科	サジラン	樹上

[参考文献]

岩槻邦男(1992)日本の野生植物・シダ　平凡社
郭城孟 (2001)蕨類入門
田村道夫(1999)植物の系統　文一総合出版
光田重幸(1986)検索入門しだの図鑑　保育社
光田重幸・永益英敏(1984)屋久島原生自然環境保全地域のシダ植物相と顕花植物相
渡邊　信・堀　輝三(1996)陸上植物の起源　緑藻から緑色植物へ　内田老鶴圃
Ernest,M.Gifford, Adriance,S.Foster(2002)維管束植物の形態と進化　文一総合出版

屋久島岳参り覚書

小原　比呂志

最古の信仰

屋久島には、居住区の埋葬地だったと推定されるアコウなどの森を、霊地として畏れる「森山信仰」があった。祟り森である森山は篤く祀られ、後にしばしば神社や寺がそこに置かれてきた。

屋久島の代表的神社である益救神社は、ヒコホホデミノミコト(山幸彦)を主祭神とし、傍神にエビス神などを祭る。しかし『三国名勝図会』(1843)には異説として、益救神社は蛭児(エビス)神社であると記録された例が紹介されており、こちらのほうが面白い。エビス信仰は漂着物や海底から持ってきた石を祀るものが原型で、日本沿海の海洋民が古くから伝え、原初の信仰の雰囲気を持つからである。

古事記・日本書紀にある、天孫山幸彦が海幸彦を屈服させるくだりは、大和朝廷による南九州のハヤト支配の経過説明と正当化を、ハヤトの神話を取り込んでシナリオ化したものと見られており、ホデミノミコト(山幸彦)を祭る神社は森山信仰とともに鹿児島県各地にも分布している。

屋久島の主邑であっただろう現在の宮之浦の村にエビス神と森山が祀られ、そこに後から山幸彦が上塗りされる形で益救神社が成立したのではないか。

海から望む嶽神

種子島屋久島の歴史は古く、種子島では日本列島最古クラスの遺跡もいくつか発見されている。古くから様々な文化が伝えられていたことがわかる。

海岸の山や岩、目を引く島を目標として航海の指針を立てることを「山あて」といい、現在でも重要な操船技術である。海にそびえる屋久島は、縄文時代に始まる九州西岸から南島への航路や、中国から種子島や九州へ向かう航路の要である。薩摩半島の開聞岳や野間岳と同様に、航海の安全を守る海の嶽神として定着したと考えられる。

奈良時代から平安時代、鎌倉時代と、九州への支配が確立し、交易が盛んになるにつれて、航海の守護神として屋久島の嶽神の存在感は次第に高まっていっただろう。

日本列島の古代には、縄文時代に起源を持つ山上祖霊・御霊信仰があったとされる。屋久島にも奥岳には祟りがあり奥山への入山ははばかられるという伝承が残るが、それがいつごろどのような形で始まったのか、森山信仰と関係があるかどうかは、実は不明である。後述する修験道や日蓮宗と関係する比較的新しい感覚かもしれないと考えている。

修験道と岳参り

麓から山を拝むのが基本だった古代の山岳信仰に対し、平安期からは山に入って頂上を踏み修行の場として開山してしまう修験道が盛んになる。

薩摩の金峰山に、大峰山の蔵王権現が勧請されたのは非常に古く、実に推古二年(594)という説がある。のちにここを拠点のひとつとして、修験道の影響が広がったようだ。

薩摩・大隅の岳参りの形は、大体共通で、旧暦の 4 月、青年男子が山へお参りし、シャクナゲやサカキなどを持ち帰って里で配る。村では麓で宴(サカムカエ)を用意して待っている、というものである。これは大峰山の修験道行事の一つが伝わったもので、鹿児島でも金峰山をはじめ冠岳、行人岳、紫尾山、桜島、霧島、開聞岳、野間岳、高隈山、黒尊岳、さらに屋久島をはさんで口之島、中之島、諏訪之瀬島、悪石島、平島と殆ど全ての山で行われている。

中世のころ高野山系修験道が勢力を広め、山伏が三岳参りなどの修験行事を組織的に広めたということだろう。屋久島の岳参りはその一環なのである。

霧島信仰との類似

もう 15～16 年前になるだろうか、上屋久町歴史民俗資料館に『屋久島大絵図』の実寸コピーが展示されているのを知って見に行った。制作時期に関しては諸説あるが、17 世紀中頃から 18 世紀初頭に作られたと推定され、薩摩藩政時代の屋久島の地理が垣間見られる資料として唯一のものだ。山道が結構正確に描かれており、山名が現在のものとかなり違うのがなかなか面白い。

つぶさに見てゆくうちに「黒御嶽」とあることに気がついた。黒味岳の岳参りは現存しないが、本来これが「御嶽」だったとすれば信仰の対象になっていたはずである。

興味が湧いて黒味岳に石祠がないか精査してみた。山頂の祠は普通雨のあたらない岩陰に置かれる。山頂周辺にはいい岩陰が多かったが、結局発見できなかった。

数年後、ある人から黒御嶽＋花之江河が水神としてセットで信仰されている可能性を教唆された。霧島にその典型的なものがあると聞き、見学に行った。

霧島北麓に温泉で有名な白鳥神社がある。その昔ここから岳参り道が山上の六観音御池へ通じていた。(今は楽をして、えびの高原からゆく。)よく整備された「池巡りコース」を歩き、六観音御池神社に着くと、屋久杉のような大杉がある。ちょうど紅葉の盛りで、美しい池畔から拝む韓国岳の姿は神秘的なものだった。

次に向かった高千穂峰と御池には、ずばり水天宮(竜神＝水神)の石塔が農業用取水口の傍らに祀られていた。

山上で御霊が浄化されて山を下り水源(池)をなすという、弥生時代以来の水神＝農業神信仰は、柳田國男以来の定説だが、高千穂峰が雨水を集め、御池がそのシンクとなる姿は、まさに水神の典型である。

念のために説明すると、水神は海神ではない。雨をもたらす真水の神である。鹿児島には大小の火口湖が多く、水神信仰＝竜神伝説は広く分布している。

「黒御嶽信仰」と花之江河

黒御嶽＋花之江河の組み合わせは、なるほど古風な水神信仰の形を移したように見える。

屋久島では、下屋久側のほとんどの村から長大な参詣道が花之江河へと続いている。湿原のほとりから正面にそびえる黒御嶽を祀るとすれば、山岳信仰として実に美しい形である。この形の祈拝であれば山頂に登る必要はないので、黒御嶽の山頂に祠が無い理由も説明できる。

上屋久側の村は、花之江河には関係ないと思われているが、実は登っている。尾之間温泉に祀られる子間姫神社(竜神、温泉神)に、1844 年宮之浦二才中(にせちゅう。昔の青年団)が奉納した石祠がある。右手に「宮之浦所中　疱瘡退散　老若男女息災延命　祈所」、左手に「天保十五甲辰九月大吉日　宮之浦　二才中」とあり、猛威を振るった天然痘の対策を行った事がわかる。これとまったく同じ文言の石祠が花之江河にもあるのだ。おそらく二才たちはまず一基を尾之間に、さらに山へ登りもう一基を花之江河に奉納したのだろう。

宮之浦岳を祭る宮之浦の人がわざわざ尾之間から登るのはなぜか。温泉が一種の医療機関だったことと共に、黒御嶽花之江河信仰に独自の存在感があったからではないだろうか。

典拠は不明ながら上屋久町郷土誌の年中行事の項に、「御嶽の権現様の親神にあたる霧島権現」という、ある人のことばが記録されている。前述のとおり、山伏がおそらく鹿児島から岳参りの形式を屋久島へ伝えており、この流れの中で霧島のような水神信仰が黒御嶽に移植されたと考えるのは楽しい。頂上に石祠が無いのは、より古い形を残している可能性もある。

屋久島は古来陸稲が主で、水田が作られるようになったのは泊如竹の指導以降だという説がある。そうであれば屋久島に水神を祀る実質的な意味はあまりなかったことになる。如竹以前に水神信仰が形だけ移植されたのだろうか、それとも霧島信仰の伝来は如竹以降なのだろうか。

前述の『屋久島大絵図』は 1600 年代のものだが、そこには花之江河の地名がない。これは、まず湿原とセットの「黒御嶽」の信仰があり、島民の入山が盛んになるとともに拝所の湿原が花之江河と呼ばれるようになって名勝として独立し、反対に黒味岳自体はやや存在感が薄くなった、と解釈することもできる。

1843 年の『三国名勝図会』にはちょうど前述の疱瘡石祠奉納と同時期の花之江河参りの様子が載っている。挿絵には明らかに黒味岳が描かれているが、「～北方の山面には巌石層立して懸崖多し」とあるのみで文にも挿絵にも山名の記載はない。

御嶽と前岳

屋久島では宮之浦岳・永田岳・栗生岳(芋生岳)の三岳を「御嶽ノ宮」として祀る。ただ屋久島は少し変わっていて、各村それぞれに「前岳」があり、岳参りは前岳班と御嶽班の 2 コースに分かれる例が多い。栗生の例では御嶽班がさらに花之江河～三岳循環コース組と三岳往復コース組に分かれ、計 3 コースを送り出すこともあったらしい。島外にこのような例はあまり見当たらない。

古代は奥岳域に入るのがはばかられた。しかし前岳が奥山の景観を隠すので、前岳まで登ってそこから御嶽を拝むのが古い形であったかもしれない。

村によっては御嶽と前岳のセットがない。御嶽が直接見える永田には前岳にあたるものが無いし、前岳と奥岳のギャップが激しい吉田や志戸子では前岳参りのみ行っていた。これが古いタイプの岳参りかもしれない。

山頂を踏むタイプの岳参りは修験道の行そのものである。またホデミノミコト転じた一品宝珠権現の名は、鎌倉時代に隆盛した「本地垂迹説」、よろずの神はいずれも仏の仮の姿、すなわち権現であると見なす思想、に基づいており、修験道に権現神はしばしば登場する。

奥岳へ踏み込んで宮之浦岳、永田岳、栗生岳の三岳を「御嶽ノ宮」の奥社とし、頂上参詣を新規に島内に定着させたのは中世の山伏だと思われる。

これとは別に楠川は石塚山を、安房は太忠岳を奥宮として祀っている。前述の花之江河の例もあり、岳参りには統一基準があるわけではなく、しばしば形態は変化するようだ。

村ごとに祀る山が違うということは、むしろ後に述べる藩政時代の伐採権にからむ村の境界分けが関係している可能性が高い。

修験道と日蓮宗

中世のころの宗教は、勧進や交易の目的で盛んに活動している。屋久島にも貿易や公共事業を進めた律宗の寺院が古くはあったらしい。15 世紀の中ごろから、熊野三山の修験者が種子島経由で屋久島に現れ始める。また英彦山修験につながり倭寇の中心であった松浦党も種子島に介入し、さらに後に鉄砲衆として名を馳せた根来衆も種子島に来ている。霧島などの薩摩山伏も岳参りに影響を与えている。

しかし、最終的に屋久島を教化したのは、日蓮宗(法華宗)だった。鎌倉時代に始まる日蓮宗は、瀬戸内海を中心に、港伝いに成長拡大した新興宗教で、港湾都市の商人をターゲットに勧進を進めて資金力を蓄え、中世に貿易中継地として栄えた種子島へも勢力を拡げてきたらしい。種子・屋久への布教を完成させたのは本能寺開祖の日隆の高弟、浄光院日良である。

このとき屋久島の嶽神は鳴動し怪異を起こして布教に抵抗する姿勢を見せた。1488 年、種子島家の要請を受け、事態収拾のため来島したのは、後の本能寺権大僧都、日増だった。

日増は大物である。宗祖日蓮は宗敵の山伏たちを相手にサイキックな折伏(しゃくぶく)戦を繰り広げたことで知られるが、継承者日増も永田岳で折伏を敢行した。嶽神はついに日増の法力に屈し、法華経の奉納と、「妙法一品法寿権現」の名を受け入れた。以来屋久島は 400 年にわたり「南無妙法蓮華経」のお題目轟く島となった。

日蓮宗はもともと密教と修験道の影響を強く受けており、種子島屋久島では修験道を取り込む形をとったらしい。日増の折伏が岳参りの始まりだとする見方もある。

『屋久島大絵図』によれば今の楠川前岳に「浄光坊山」とあり、浄光院日良への敬意を感じさせる。また「明星岳」は大峰や箱根にもある修験霊山の名で、日蓮宗が篤く祀った明星天子に由来する。明星天子は金属の神である虚空蔵菩薩の異名である。山伏は各地でしばしば鉱山を開発しているが、興味深いことに明星岳では後にタングステン鉱山が発見されている。

島津家と泊如竹日章

島津家は、領内各地の修験寺に山伏をまとめ、それらとの連絡中枢機関として真言寺院の「大乗院」をあて、諜報機関として利用した。この大乗院の責任者が、島津家の外交顧問であった文之和尚である。そして文之の朱子学の高弟が泊如竹だった。

日蓮宗の僧であった泊如竹日章は、薩摩藩の政治顧問を務めるなど、朱子学者としての実績で知られ、屋久島でも私財をなげうって公共事業を推進したことでいまなお崇敬されている。1640 年に薩摩藩に建策され、彼の最大の業績となった屋久杉伐採の開始は、日増ばりの 17 日間(7 日間ともいう)にわたる強力な山中加持祈祷を成し遂げたことによるものだった。如竹はこのとき 80 歳に近かったはずである。山篭りには島内外の山伏が協力したのではないか。

このとき示された如竹の法力を精神的支柱として、島民は祟り神の世界だった山へ乗り込み、屋久杉の伐採を開始することができた。屋久杉材は年貢のノルマ以外は全て藩が買取ることになっており、この薩摩藩の資本投下により島の経済は一気に活性化した。日蓮宗寺院は経済的裏づけを手に入れ、それ以上に鹿児島は独占販売で潤った。そのためか、浄土真宗(一向宗)を厳しく弾圧した薩摩藩が、屋久島の日蓮宗に対しては明治の廃仏毀釈まで手を出さなかったのである。

日蓮宗の興隆で、神社は一時衰退したという。益救神社すら一時は所在不明になったと言うから半端ではない。

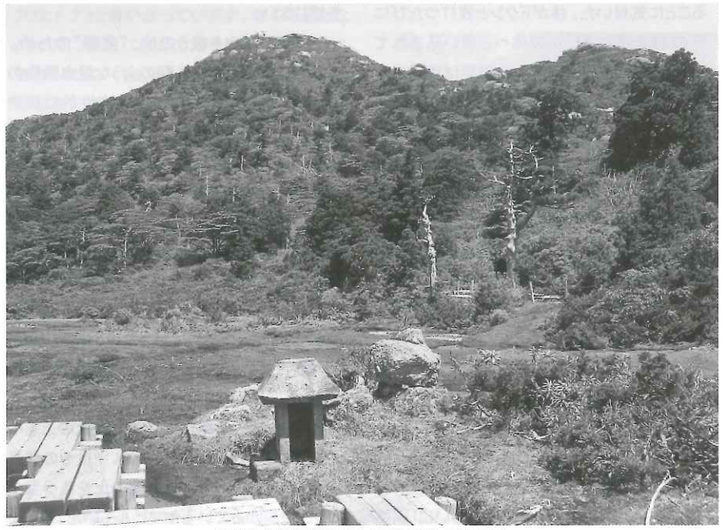
泊如竹の建策後 45 年を経た 1685 年、薩摩藩屋久島抑(おさえ)の町田孫七が益救神社を再建し、参詣を奨励した。これによって御嶽ノ宮参りが再び盛んになった。村ごとに行われる岳参りは、伐採神事としての性格を持つようになり、屋久杉伐採の許しを嶽神に乞う儀式となった。藩が屋久杉伐採にあたる島民の、心のケアのために岳参りを機能させたわけである。

益救神社の再建当初、益救神社の管理にあたったのは宮之浦の久本寺(日蓮宗)だったという。いまもサカムカエに僧侶が参加するのは、日蓮宗が岳参りの支援にまわった名残だろうか。

かくして岳参りは、屋久杉材生産の心理的免罪符として、近世の産業構造に組み込まれていった。

参考文献

三国名勝図会巻之五十 1843(復刻 1982)
山本秀雄「文献資料紹介」季刊生命の島連載 1984～
屋久町郷土誌第一巻村落誌上 1993
上屋久町郷土誌 1984
図説屋久島　屋久島環境文化財団 1996
網野善彦　日本の歴史をよみなおす筑摩書房 1996　ほか
窪田仲市郎　霧島神宮　春苑堂出版　1995
下野敏見編　民俗宗教と生活伝承．岩田書院 1999
下野敏見　南九州の伝統文化Ⅰ,Ⅱ　南方新社　2005
中村明蔵　ハヤト・南島共和国　春苑堂出版 1996
松下志朗・下野敏見　鹿児島の湊と薩南諸島　吉川弘文館 2002
宮本常一・川添登　日本の海洋民　未来社 1974
松井日俊　儒僧の泊如竹日章　桂林学叢 16 号 pp167-209　1997
森田清美　さつま山伏　春苑堂出版 1996
宮家準　修験道と日本宗教　春秋社 1996



黒味岳を仰ぐ位置にある天然痘除けの石祠。
『三国名勝図会』にもこの角度で描かれた挿絵が載っている。

やくしま 有象無象

ヤマビルだって生きている！

森歩きでよく「ヒルがいますか？」と質問される。このような質問をする人には気の毒だが、屋久島にはヤマビルがいる。森の嫌われ者に、蜘蛛、蜂、ミミズ、蛇、蚊などが挙げられるが、中でもヤマビルは抜群の不人気さだ。

ある日、森の中で我が腕の上を歩くヤマビルがいた。体をもちあげては進むべき道を吟味するように頭をゆらゆら、尺取り虫歩きで手首の辺りを前進していた。もうすぐ血液にありつけるヨロコビさえにじみ出ているようなこの呑気な動きに、少なからずも心を動かされた私は、このまま血を吸わせてみることにした。

まず、気になるのが我が腕に吸いつく瞬間だ。ヤマビルは楽しそうに尺取り虫歩きをしていたが、ふと皮膚の柔らかそうな辺りで停止した。キュッとストローで吸いつかれたような感触があり、そこでそれは動かなくなった。ティラノザウルスが獲物を襲う時のように、頭を高く持ち上げ、口をクワッと開いて一気に噛み付く姿を勝手に想像していた私にとって、ヤマビルの噛み付きはあっけなく地味だった。

音もなく、もくもくと我が血液を吸い続けるヤマビルは10分ほどで、2倍に太った。その時、この生き物は体を波打たせながら吸血していることに気付いた。体がドクンと波打つたびに私の血液がヤマビルの体へと吸い込まれていっているようだ。しかし、私自身は気持ち痒いような感覚はあるものの、特に痛いとは感じなかった。そして20分後、さらに太ったヤマビルは、全身がぬらぬら、ぎらぎらと濡れ始めて、ちょっと色黒のナメクジのような姿になった。口の辺りからは透明の液体が流れ出ている。実はこれ、“水”なのだ。なんとヤマビルは血液を吸う際に血中の養分だけを濾しとって、余分な水は捨ててしまうのだそうだ。あの小さな体のどこに血液が入っていくのだろうと常々感じていたが、この“ろ過”の話を聞いて、「やるなー。」と大きく納得した。

その後もヤマビルは吸血を続けるが、体が3～4倍位に太った辺りでペースが落ちた。それでも、たまにゆっくりと体を波打たせていた。そして約1時間後、ヤマビルはついに「満腹宣言」を出した様子で、すっかり太りきった体は真っ直ぐを保てず斜めに傾いていた。それでも口は手首から放さない。こうなると、もうこれ以上飲めないのがわかっているのに、どうしても酒瓶が手放せない酔っ払いと同じである。「どうしようもないねえ。」とつんつんすると、それはころりと手首から落ちた。

「私の血でどれ位生きるのだろう…。」今度はそこが気になる。持ちかえり、紙コップの落ち葉の中で飼うことにした。しかし、私はヤマビルは体の表面が湿っていないと皮膚呼吸ができないとは知らなかった。一日一回の霧吹きだけでは不充分だった。大丈夫だろうとタカをくくって二日程サボったら、ヤマビルはカチコチに固まって死んでしまった。まだ名前も付けていないのに、かわいそうな事をした。

田んぼにいるチスイビルのような水棲ヒルが多い日本で、ヤマビル（*Haemadipsa zeylanica japonica*）は代表的な吸血性の陸棲種だ。秋田県から沖縄県までと、その分布は全国的。一般的にヤマビルは山奥でひっそりと生きているのだが、ここ近年、人家や農地へとその分布を広げている地域もある。平均気温が10度以上の時期に活動を行い、寒い冬は土壌、コケ、落ち葉、石の下などで越冬する。

ヤマビルは顎に鋭い3枚の歯を持っており、それで皮膚をY字型に切り、血を吸う。その時に唾液腺から“ヒルジン”という血液の凝固を防ぐ物質を出し、吸血をスムーズにさせる。ゆえに吸血された後、出血がだらだら暫く止まらないという事態になる。これは少し厄介だが、命に別状はない。そして、同時にモルヒネのような物質も出すために、吸血されても痛みを感じない。

ヤマビルが血を吸うのは、“産卵”のため。蚊の雌と同様に、哺乳類のような温血動物の血液中にある化学物質がヒルを性的に成熟させる。一回の産卵で、5～6体の子ビルが産まれる。子ビルが成熟するのに早いもので5ヶ月。その間に4～5回の吸血を行う。吸血していない時のヤマビルは、獲物が接近してくるまで地表から少し潜り、じーっとしている。無駄なエネルギーは使わない主義らしい。ヤマビルの寿命は2～3年だとされているが、この妙な生き物の生態については、不明な点がまだまだ多い。ヤマビルの天敵も見つかっていない。

ある日、湿った森の中で私の長靴の上をゆらゆらと登っているヤマビルがいた。その延長で足元に目をやると、落ち葉の上を私へ猛ダッシュで向かっているヤマビルもいた。まるで出発寸前のバスに乗り遅れまいと走るその必死の姿に私のココロは熱くなった。ヤマビルは確かに嫌われ者かもしれない。しかし、彼らだって一生懸命生きている。それで十分。

（鷲尾紀子）

参考文献

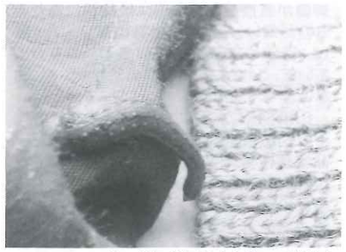
＊朝日百科「動物たちの地球」／朝日新聞社

＊ヤマビルの生活環　／山中征夫・山根明臣／日林論

＊ヤマビル研究会

www.tele.co.jp/ui.leech/index.htm

（ヤマビルに関する情報を集めています）



ヤマビルは足元からやってきます。

虫こぶのはなし

それは、西部照葉樹林ツアーに同行したときの事。足元に丸い木の実のようなものが落ちていた。手にとってみると大きさは握りこぶしよりも一回り小さく、表面は木のように固く、そして軽かった。中は空洞になっているらしいが、振ってみても何の音もしない（上写真）。

「？？？愛さん、これはなんですか？」。そう尋ねると、彼女の目がきらりとひかり説明をしてくれた。「これは木の実じゃなくて、虫こぶ。虫が植物に刺激を与えると、植物側が反応してこんな形のこぶを作るんだよ。」。それだけ言い残すと、彼女はその虫こぶに穴を開け、笛にして遊び始めた。いつもの通りヒントだけを与え、後はそ知らぬ顔をする彼女を尻目に、ふつふつと湧き上がる疑問。虫こぶとは何ぞや？　そして、虫たちはどうやってこの奇妙なこぶを植物に作らせたのだろう？　調べてみると、虫たちの巧妙な仕掛けが見えてきた。

植物に“こぶ”ができる現象は古くから知られており、中から虫が見つかる事が多いため、こういった“こぶ”を「虫こぶ」と呼んでいた。しかし、“こぶ”を作らせるのは昆虫類だけではなく、ダニ類、線虫類、菌類、細菌類等もいる事がわかり、「虫こぶ」と呼ぶには不適当となり、現在では“ゴール”（Gall）と呼んでいる。面白い事に、ゴールとそれを作らせる生物の間にはほぼ1対1の関係が成立するので、ゴールを見ればそれを作らせた犯人が分かる。その日見たのはモンゼンイスフシというイスノキにできるゴールで、犯人はモンゼンイスアブラムシ（*Sinonipponaphis monzeni*）というアブラムシだった。どうやら個々の虫たちが植物に作らせているのはまちがいないが、いったいどうやって？

春になると、アブラムシの雌の幼虫はイスノキの新芽に口先を突き刺し、何らかの物質を送り込むらしい。すると、新芽の細胞内では植物ホルモンのバランスが崩れ、組織が異常に分裂・肥大をはじめる。その時、犯人である雌も一緒に組織に包み込まれてゴールができるのだそうだ。雌は中で単為生殖（雌が雄なしに子供を産む）を繰り返しながらどんどん増え、ゴールの内壁から植物の栄養分を吸って成長した後外の世界へ飛び出していく。なんと、アブラムシは口先一つでイスノキに「マイホーム」を作らせ、食料まで奪うのだから、まるで盗人だ。

こんな悪行は許されるはずがない！きっと植物だって何か対策を講じているはずだ！と思い、さらに調べてみたが、その予想はあっさりと覆された。アブラムシがゴール内でイスノキの栄養を吸い続けているのにも関わらず、ゴールは枯れることなく、むしろ活発に成長を続ける。これは一見、植物が手助けをしているようにも見えるが、どうもただ騙されているだけのようなのだ。多くのゴールでは、ゴールとそれを作らせる生物の間で行われる物質のやり取りはまだ分かっていない事が多い。しかし、中には植物の遺伝子に働きかけゴールを作らせるといった、遺伝子操作を行う細菌がいたり、ある虫が作らせるゴールからはわずかな量で植物細胞を活性化させる、植物ホルモン（ブラシノステロイド系の物質）が見つかっている。

このように、ゴールを作らせる生物は巧妙な手口で植物を騙し、マイホームを手に入れ、植物の栄養を盗み取る。けれども、このゴールが仇となる事もある。屋久島の西部照葉樹林内にはたくさんのモンゼンイスフシが地面に転がっている場所があるが、多くは既に割れている。もしかしたら、中のアブラムシを食べるためにヤクザルが齧った後なのかもしれない。安全だと思われたゴールも、サルから見れば「アブラムシがこの中にいますよ」という目印になるのではないだろうか？そんな、志半ばで散ってしまったモンゼンイスフシの残骸を眺めていると、泥棒稼業も楽じゃないなぁと思ってしまうのである。（佐藤崇之）

参考文献

＊虫こぶ入門／薄葉重／八坂書房

＊虫こぶハンドブック／薄葉重／文一総合出版

モンゼンイスフシ

ヤッコソウのキャップ

植物の名前を覚えるためにスケッチをしよう、と屋久島の写真集をパラパラめくっていると、変わった植物と出会いました。名前はヤッコソウ。ヤッコソウ、ヤッコソウ、ヤッコソウ…今にも動き出しそうなかわいい形。

それから数日後の10月21日。いつものように西部照葉樹林のツアーに同行していると、足元に小さな白いかたまりがたくさんありました。「あっ。この前の…ヤッコソウ！！！」。写真でしか見たことのなかった植物を実際に発見すると、まるで長年憧れていた芸能人に会えたような嬉しさを感じるのは私だけでしょうか？この日私が見たのはまだ花が咲く前だったようで、写真集で見たものよりも少しボッテリした感じでした。

11月13日。再びヤッコソウと出会いました。今度は一緒にいた人達が「メスはあった。オスは！？」と言い合っています。なんでそんなにオスに夢中になるのだろうか…オスとメスの違いって…そもそもどんな花が咲くの…？事務所に戻ってこっそり調べてみると、ヤッコソウはとても面白い受粉の仕組みをもっていることが分かりました。

ヤッコソウ（ラフレシア科ヤッコソウ属／*Mitrastemon yamamotoi*）とは葉緑素を持たず、スダジイなどブナ科シイ属の植物の根から養分等を得て生活する寄生植物で、普段は土の中にいますが、繁殖時期の秋にだけ地上に出てきて花を咲かせます。その姿が「奴さん」に似ているため、ヤッコソウと名付けられました。年に一度咲かせる花は、まず全てがオスになります（雄花期）。花の先端に黄色い帯状の模様（葯帯：やくたい）がついているのがオス、雄花です。葯帯にはねばねばした花粉がついていて、奴さんの手の部分（鱗片葉）にたまった蜜を舐めにきた鳥やハチが花粉を運びます。ではお相手のメスは？というと、オスが次第にメス（雌花期）に変身していくのです。

一般に雄蕊（おしべ）は一つ一つ離れているのですが、ヤッコソウの場合は雄蕊がくっついて雄蕊筒とよばれる筒状のキャップを作ります。花粉を出し終えると、中に隠れている子房が雄蕊筒を押し上げるように成長し始め、やがて雄蕊筒は根元から切れて中からメスが登場します。花の先が丸く、ボールのようになっているものがメス、雌花です。つまり、オスのキャップがはずれると、メスに変わっているのです（下図）。ヤッコソウのこの仕組みは自家受粉を防ぐ工夫のようで、自分の花粉を自らが受粉してしまわないよう、花粉が運ばれ終わる頃までメスはキャップを被ってじっと耐えているのです。なんだかとても健気な感じがします。

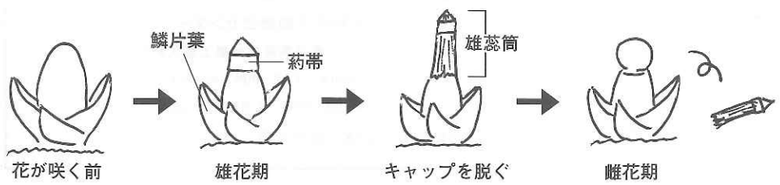
無事受粉を終え、種子を作るとヤッコソウは黒くなり、やがて枯れてしまいます。次、地上に奴さんの姿を現すのはまた来年です。皆さんも秋に照葉樹の森の中、特に大きなスダジイの近くを歩く時は足元に十分注意して歩いてみてください。ヤッコソウの健気な姿が見られるかも知れませんよ。（長谷川りえ）

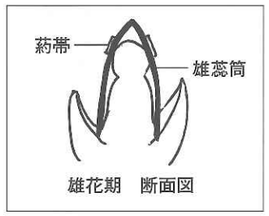
参考文献

＊朝日百科「植物の世界40」／朝日新聞社

＊日本の野生植物／平凡社

手前は雌花期の個体。受粉後で先端が黒くなっている。奥は雄花期の個体。





Calendar・2004～2005

9/13 ダイビングクラブ 「お宮下・センロク鼻」
9/28~29 台風 21 号 屋久島接近
9/26~30 松本 天草にてモニタリング手法講習会 参加
10/4 ダイビングクラブ 「栗生」
10/8~9 台風 22 号 屋久島接近
10/9 自然クラブ 「落川沢登り」
9 月が大雨で流れ、10 月も台風の直後で開催が危ぶまれましたが決行。もちろん激流に突っ込むことはできませんが、川の変貌振りを目の当たりにした貴重な機会でした。
10/23~24 松本・高橋 サンゴ調査 「口永良部」
10/25 自然クラブ 海部 「永田～吉田」
10/24~27 小原 エルダーホステル「にっぽん丸」 船内講師
10/29 山の神祭り
11/1～3 松本・高橋 サンゴ調査 「種子島」
11/4～6 風の大空「名峰愛子岳と白谷雲水峡キャンプ」
2004 年風の大空・初企画。愛子岳から小杉谷へ続く旧道を歩き、森の中でキャンプ。天気にも恵まれ屋久島の深い森を堪能した 3 日間になりました。
11/5～8 松本 秋田・白神山地にてパネリスト
11/14 自然クラブ 「高盤岳登山」
11/14 ダイビングクラブ 「志戸子・タンク下」
11/17 自然クラブ 海部 「尾之間～湯泊」
11/15 松本・高橋 サンゴ調査 「志戸子」
11/16～17 松本・高橋 サンゴ調査 「竹島・硫黄島」
11/20 風の大空 「始めての屋久島の山歩き」
11/22 松本・高橋 サンゴ調査 「栗生」
11/25 松本・高橋 サンゴ調査 「お宮下・管理棟下・センロク鼻」
11/26 鷲尾・藤村 登山道整備 「栗生歩道」
11/27 小原・佐藤・樫村 登山道整備 「投石」
11/30 松本・高橋 サンゴ調査 「栗生」
11/30 小原・樫村 登山道整備 「投石」
12/1 白谷雲水峡清掃作業
ガイド連絡協議会主催の白谷清掃作業に参加。屋久島のガイド同士で白谷を歩き、共に問題点を検討しながらの作業となり、また行政機関の方々も参加され、白谷の現状を検討する良い機会となりました。
12/5 自然クラブ 「鯛之川大渕」
12/8～9 松本・岡田 登山道整備 「永田岳～鹿の沢小屋」
12/11 松本・高橋 サンゴ調査 「種子島・住吉」
12/12 小笠原エコツアー視察団 YNAC エコツアー参加
12/13 屋久島ガイド連絡協議会 エコツーリズム懇親会
知床・小笠原・屋久島とエコツーリズムモデル 3 地区の業界関係者が屋久島で一堂に会するということで、ガイド連絡協議会主催で懇親会が催されました。
12/14 知床自然センター視察団 YNAC エコツアー参加
12/15～16 鷲尾・藤村 登山道整備 「栗生歩道」
12/19 自然クラブ・海部 「平内」+忘年会
12/29～1/4 年末年始休業
1/7～1/10 風の大空 「モッチョム岳登山＆シーカヤック体験」
1/15 土曜日の森 「森のスカトロジー」
2005 年初企画、自然クラブに続く第 2 弾。屋久島の自然をもっと詳しく知っていこうということで、半日だけのフィールドワーク講座を企画しました。初回は 20 人を越える応募があり、盛況の内に第一回は終わりました。

Contents

巻頭言「地域の伝統文化」 松本 毅 1
YNAC通信20号特別企画
Best Season Best Spot in Yakushima 市川 聡 他 2
自然クラブ 「海部」 岡田 愛 6
シダの話と、白谷雲水峡のシダ 樫村 精一 8
屋久島岳参り覚書 小原 比呂志 12
屋久島・有象無象 鷲尾 紀子・佐藤 崇之 長谷川 りえ 14

Library

・「自然保護」No.483 小原
「ガイド・インストラクターとしての自然派センスを磨く！」というテーマで、小原がエコツアーガイドとしての心得、今年実際ツアー事例などを紹介。

編集後記

☆近年の自然災害を見ていると、また地球が動き出したかのようです。「地球にやさしい」なんて言ってられず「人類にやさしく」と言わざるを得ません。(M.T.)
☆「この森の 寒波に立つ ヒメシャラ有り 飛騨」
一糸まとわぬ姿で森に立つ冬のヒメシャラが好きです。今年のテーマは 'Tough＆Beautiful' (W.N.)
☆新年早々、屋久島の山に雪が降りました。照葉樹の緑と雪の組み合わせは初めて見る風景。いつかスキーで滑りたいなぁ！(S.T.)
☆毎日いろんなことを少しずつこなそうと思います。
今年のテーマは「慎重」・「堅実」にします。(K.S.)
☆年始年末に 1 年間の写真整理をしました。いい出会いが沢山あったなぁとしみじみ感じています。(H.R.)
☆今年は心を入れかえて勉強します。(O.H.)
☆YNAC 通信が 20 号を迎え、記念すべき機会に編集長であることを嬉しく思っています。しかし、気合が入りすぎた為に発行が遅くなり、楽しみにされていらっしゃる読者の皆様に大変ご迷惑をおかけしたことを心よりお詫び申し上げます。2005 年もどうぞよろしくお願い致します。(F.S.)
☆空前のベビーラッシュにわく屋久島のガイド界。30 代を目前に、一人黙々とヤクシカの皮をなめしたり、フンを拾ったり…。私って ふふ…。(O.A.)
☆久しぶりに東京へ行ったら、見事にB型インフルエンザヴィルスをゲット！今年屋久島では目でたく初記録という事で、おとなしく隔離されています。だんだん虚弱になっていく…。(I.S.)
☆この冬、人にものを「伝える」という自分の仕事について思いをめぐらしている。同時に、自分が歩んできた人生についても振り返り消化吸収しようとしている。私のシーズンが始まる前に、大地の下で力強く丈夫な根を張っていこう！そんなことを考えている今日この頃です。(T.H.)

YNAC 通信（ワイナックつうしん） NO.20
発行日：2005 年 2 月 1 日
発行：㈲屋久島野外活動総合センター

住所：〒891-4205 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦 368-21
TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-0945
E-mail：forest@ynac.com URL：http://www.ynac.com/

表紙写真：高塚小屋の夕陽